は　じ　め　に

サッカー・スポーツを通して 21 世紀のゆたかなくらしづくりを“志”とする異業種ネットワーク「サロン 2002」は、毎年公開シンポジウムを開いています。2006 年度は年度末の開催となり、報告書作成にも手間取りましたが、ようやく完成し、皆さまにお届けすることができました。

サロン 2002 の公開シンポジウムのテーマは次のとおりです（これらはいずれも報告書にまとめています。バックナンバーを希望される方は、事務局までご連絡ください)。

2001 年度　2002 年とその先へのメッセージ～コンフェデ杯は私たちに何を残したか～
2002 年度　2002 年 FIFA ワールドカップを振り返って～2002 年以降に何を残すか～
2003 年度　2002 年を越えて～地域で育てるこれからのスポーツ環境～
2004 年度　ｔｏｔｏを活かそう！～地域スポーツ振興のために～
2005 年度　クラマーさん、ありがとう！

2006FIFA ワールドカップ・ドイツを控えた 2005 年度は、日本サッカーの父、デットマール・クラマー氏をお招きすることができました。80 歳を超えるとは思えない、活力あふれる話しぶりとオーラに､参加者一同､強く感銘を受けたのは記憶に新しいところです。

クラマーさんを育てたドイツで開かれた 2006 年 FIFA ワールドカップにて､サロン 2002 ははじめて、海外での月例会「出張サロン in フランクフルト」を開きました。その模様は巻末の資料に掲載されています。そしてシンポジウムのテーマも「ドイツで感じたこと」としました。

全国各地で、様々な分野で活躍されているサロン 2002 の会員は、2006FIFA ワールドカップも、それぞれが思い思いに楽しみました。今回の演者は、それぞれの立場でドイツ大会に深く関わった方々で、シンポジウムでは貴重な情報を提供していただきました。池田誠剛氏は大会期間中､「育成環境」の観点からドイツのクラブを訪問し、そこで得た知見を報告しました。1975 年からドイツで暮らす庄司悟氏は、独自の視点での「ゲーム分析」の手法と、それによって導かれたワールドカップのゲームの見方を紹介しました。サッカー観戦ツアーを企画されてきた徳田仁氏は「観戦文化」の観点から、ドイツ大会を振り返りました。

本報告書には、シンポジウムの内容だけでなく、後援してくださった団体の方々（いずれもサロン会員）からも貴重な原稿をいただきました。あわせてお楽しみいただけると幸いです。

2007 年が終わろうとしています。2006FIFA ワールドカップ・ドイツは、遠い昔のできごとのようです。

ドイツから、ドイツ大会から、何を学ぶのか。この冊子がその一助になれば幸いです。

2007 年 12 月

サロン 2002 理事長　　中塚義実

目　次

はじめに 1

サロン２００２理事長 中塚義実

目　次 2

Ⅰ．シンポジウム 3

シンポジウム開催要項 4

シンポジウム　第１部

はじめに　中塚義実 6

ドイツの選手育成から学ぶこと　池田誠剛 10

ゲーム分析に見る現代サッカーの真相　庄司　悟 22

チケットから見えたドイツ２００６　徳田　仁 35

第２部

ディスカッション 49

質問と回答 57

参加者アンケート 60

Ⅱ．寄　稿 61

グローバル時代の新しいワールドカップ 62

ビバ！サッカー研究会 代表　牛木素吉郎

ワールドカップの翌年に開かれる科学のワールドカップ 67

日本フットボール学会 会長　大橋二郎

ヨココム的 ２００６年ワールドカップとは 69

ＮＰＯ法人横浜スポーツコミュニケーションズ　理事長　依藤正次

Ⅲ．資　料 73

《サロン２００２メンバーのドイツ紀行》

Mクリニックのドイツ W杯＆スポーツクラブ視察研修 74

三日市整形外科　田中俊也

出張サロンinフランクフルト報告 81

２００６年６月例会より

それぞれのＦＩＦＡワールドカップ・ドイツ大会 88

２００６年７月例会より

シンポジウム参加者／報告書作成にご支援いただいた方々 95

関係各位　　2007.3.12.

サロン2002公開シンポジウムのご案内

2006年　ドイツで感じたこと

育成環境、ゲーム分析、観戦文化の観点から

サッカー・スポーツを通して 21 世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする異業種ネットワーク「サロン 2002」は、2001 年度より毎年度、公開シンポジウムを開催しております。これまでのシンポジウムでは、「2002 年 FIFA ワールドカップ」「地域スポーツの振興」「ｔｏｔｏ」などを取り上げ、昨年度はデットマール・クラマーさんをお招きし、多くの方とともに、「日本サッカーの父」との熱い時間を共有することができました。

クラマーさんの母国、ドイツから、日本サッカーは多くのことを学んできました。2006 年 FIFA ワールドカップ・ドイツにも、多くの日本人が、代表チームも含めて参加し、多くのことを学びました。

今年度のシンポジウムは、育成環境、ゲーム分析、観戦文化の観点から同大会を振り返り、開催国で感じ、学んだことを今後につなげる機会とするものです。次の大会に関心が向けられている今だからこそ、2006 年 FIFA ワールドカップを振り返るこのシンポジウムに、多くの方にご参集くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

記

主　催　：サロン 2002
後　援　：神奈川県教育委員会、日本フットボール学会、NPO 法人横浜ｽﾎﾟｰﾂｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽﾞ、
　　関東クラブユースサッカー連盟、神奈川県クラブジュニアユースサッカー連盟
　　ビバ！サッカー研究会
日　時　：２００７（平成１９）年３月２４日（土）　14：00～17：30（受付13：30）
会　場　：横浜市スポーツ医科学センター（日産スタジアム）　中研修室
　　※同スタジアムで19：20から行われる予定の日本代表の試合前に開催します
演　者　：池田誠剛（横浜FマリノスCPP）　※CPP＝Chief Physical Professor
　　庄司　悟（ゲームアナリスト）
　　徳田　仁（㈱セリエ代表取締役）
コーディネーター：中塚義実（サロン2002理事長／筑波大学附属高等学校）
参加申込：氏名・所属(差し支えなければ)・連絡先(TEL／FAX／Email)を明記の上、
　　salon2002@infoseek.jpまでEmailにてお申し込みください。どなたでも参加できます。
参加費　：1000円。ただし学生は無料
事務局　：麻生征宏、高田敏志

注)「賛助金」のお願い

本シンポジウムの報告書を、趣旨に賛同してくださる個人または団体からの「賛助金」で作成いたします。「賛助金」は一口5,000円とし、拠出していただいた方のお名前を報告書に掲載させていただくことで、賛助の気持ちに応えたいと思います。さらに、４口（２万円）以上の「賛助金」をいただいた個人や団体には、報告書への広告掲載も可能とさせていただきます。大きさの目安は以下の通りです。

Ａ４版１ページ(表紙裏、裏表紙裏)…５万円以上
Ａ４版１ページ(その他のページ)　…５万円
Ａ４版１／２ページ　　３万円
Ａ４版１／３ページ　　２万円

「賛助金」をお出しいただける個人または団体は、事務局へご連絡いただいた上で、下記口座へお振込みください。よろしくお願いします。

みずほ銀行板橋支店　普通　２０７６２０７　サロン2002プロジェクト代表　中塚義実

参考：サロン2002とは何か

「サロン2002」は、以下の設立宣言に賛同する「同志」によるゆるやかなネットワーク組織です。

サロン２００２設立宣言

（２０００年4月１日）

我々は、以下に「サロン２００２の“歴史”」、「サロン２００２の“志”」及び「サロン２００２の“会員”」を述べることにより、ここにあらためてサロン２００２の設立を宣言する。

【サロン２００２の“歴史”】

サロン２００２は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社心グループ」（財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、１９８０年代後半からこの名称で活動）を前身とし、１９９７年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン２００２」として活動を行ってきた。

【サロン２００２の“志”】

サロン２００２は、サッカー・スポーツを通して２１世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン２００２の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン２００２の“志”を実現する上で、２００２年ＦＩＦＡワールドカップ韓国／日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

【サロン２００２の“会員”】

サロン２００２は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン２００２の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン２００２からの“Take”を求めるだけでなく、サロン２００２に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン２００２は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形での“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

2006 年度の会員は現時点で 122 名。全国各地にいる会員は、小・中・高・大の学校関係者、Ｊクラブ・地域クラブの関係者、フットサルや草サッカーの関係者、新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどのメディア関係者、サポーターやボランティア、サッカー以外の競技の関係者など多様です。国や地方自治体のスポーツ行政に携わる者や、ＪＦＡ、各都道府県ＦＡ関係者もいます。様々な形でサッカー･スポーツにかかわりながら、“志”を実現させようと活動する者で構成されているのが「サロン 2002」です。

「サロン 2002」の主たる活動は、月例会の開催と、その内容を核とするホームページの運営です。本シンポジウムは公開型月例会として毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しております。

サロン2002の詳細は、ホームページ<http://www.salon2002.net>でご確認ください。

はじめに

サロン 2002 の理事長を務めています中塚です。今回のシンポジウムのコーディネーターを務めさせていただきます。まず、今回のシンポジウムの趣旨、および進め方、そして演者の方の紹介をさせていただきます。お手元のＡ４裏表の資料にもあるのですが、タイトルは「2006 年ドイツで感じたこと～育成環境、ゲーム分析、観戦文化の観点から～」というものです。

サロンの公開シンポジウムを、本来は年内にやろうとしていたのですが、諸般の事情で遅れました。でも何とか年度内に開くことができました。主催はサロン 2002。後援は、お世話になっております神奈川県教育委員会。そして日本フットボール学会。この学会については一言だけご案内させていただきたいことがございます。サッカーだけではなく、ラグビーやアメリカンフットボールなども含めた、フットボールの科学に関心を持っている 2003 年に設立された学会です。こちらは、国際学会がありまして、実はワールドカップの翌年に、４年に 1 回国際学会が開かれます。今年の１月はトルコで開かれまして、そこで 2011 年の国際学会の開催地が日本に決定しました。2011 年の Science and Football という学会が日本で開かれるということを宣伝しておいてくれと言われてきたので、後援団体の紹介を兼ねて伝えさせていただきました。

そして、今回のテーマに関連して、指導者の方々が関心をお持ちだろうと思いまして、関東クラブユースサッカー連盟、神奈川県クラブジュニアユースサッカー連盟にもご後援いただきました。そして、地元横浜の NPO 法人、横浜スポーツコミュニケーションズ（横コム）にもご後援いただきました。今回の映画の紹介も横コムさんです。さらに、ビバ！サッカー研究会。ジャーナリストの牛木素吉郎さんが主催されている研究会で、後ほどご紹介します出張サロンでお世話になりました。こういったところにご後援いただき、今回のシンポジウム開催となりました。

今日のシンポジウムの趣旨は、2006 年ワールドカップの開催国であるドイツという国で感じたことを様々な角度から捉え、話し合うことです。われわれサロン 2002 は、21 世紀の“ゆたかなくらしづくり”を志したネットワークですので、豊かな暮らしを考える際の糧にしたいと考えております。

今回のシンポジウムは２部構成です。第１部は、それぞれのシンポジストの方に 30 分くらいのお話を用意していただいています。それぞれ、30 分ではとても足りないような広がりと深みを持った内容をご用意いただいております。第１部が終わったところで休憩時間

本日のシンポジウムについて

「2006年 ドイツで感じたこと」を多面的に捉え、
21世紀の“ゆたかなくらしづくり”の糧にしたい。

第1部：各シンポジストより（14：10～15：55）
- 育成環境 …池田 誠剛 氏（横浜Fマリノスcpp）
- ゲーム分析…庄司 悟 氏（ゲームアナリスト）
- 観戦文化 …徳田 仁 氏（（株）セリエ）

第2部：ディスカッション（16：10～17：30）
会場の皆さんとともに…

をとらせていただきます。そこでシンポジスと参加者の皆さんがざっくばらんな話ができる雰囲気を作ってから、第２部では和やかなムードでディスカッションしていきたいと考えております。そして、時間はあくまでも目安です。おそらく、後ろへ押してしまうのではないかと思いまが、この後、このスタジアムで日本代表対ペルー代表の試合もございますので、終わりは５時半の予定です。

主催のサロン 2002 です。この名称で活動を初めて 10 年が経ちました。いったいどんな団体なのかを簡単にご紹介します。もともと、日本サッカー協会の科学研究委員会の中のサブグループで、社会学や心理学に興味を持っている人たちの研究会が前身でした。それが、80 年代の終わりから 90 年代にかけてのサッカー界の劇的な変化、例えばＪリーグのスタート、日本代表の盛り上がり、ワールドカップの開催、フットサルの普及も大きな変化のひとつかなと思いますが、そうした変化がありました。

「サロン2002」の10年間

JFA科学研究委員会のサブグループ「社・心グループ」が前身
◆サッカー界の劇的変化
Jリーグ発足
2002年FIFAワールドカップ招致活動～開催
フットサルの誕生
◆インターネットの普及
全国各地の“同志”がネットワーク化
「ネットワーク」を「フットワーク」につなげるマインドと活動
↓
「サロン2002」としてリスタート（1997年度）
2000年度より会員制導入
2006年度は全国に122名の会員
主な活動は…
月例会 ／ 出張サロン ／ 公開シンポジウム
HP http://www.salon2002.net

もうひとつは、ＩＴ革命とでも言いますか、ネット環境の劇的な変化によって、手紙や電話だけでなく、瞬時に全国各地の同志がネットワーク化されることにより、仲間がどんどん増えていった。ただし、バーチャルなネット空間だけのお友達付き合いではなく、そこに集う人、まあサッカー好きが多いのですが、ネットワークをフットワークに繋げるマインドと活動、単純にいうと飲み会好きが多いのですが、そういう人が集まり、顔を突き合わせて、ああだこうだ言い合うネットワークとなり、単なる研究グループから、サロン 2002 としてリスタートしたのが 1997 年でした。そこから始まって今年はちょうど 10 年になります。その後、会員制を導入したりして、いろいろな歩みを進め、本年度は全国に 122 人の会員がいます。

主な活動としては、月に 1 回開催します月例会。そして、出張サロンと称して全国の会員の元へ出向いていきます。そして、公開シンポジウム。ここは、できるだけ多くの方に来ていただいて、情報を行き交うとともに、ここでまた新たなネットワークをつくっていきたいという趣旨です。

サロン2002　公開シンポジウム

- 2001年度…コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム
  「2002年とその先へのメッセージ」
- 2002年度…FIFAワールドカップ総括シンポジウム
  「ささえる物語」「観戦と交流の物語」
- 2003年度…2002年を越えて
  「地域で育てるこれからのスポーツ環境」
- 2004年度…totoを活かそう！
- 2005年度…クラマーさん、ありがとう！
- 2006年度…2006年　ドイツで感じたこと
  ー育成環境、ゲーム分析、観戦文化の観点から

「出張サロン」のあゆみ

- **1998年度…鹿島**
- **1999年度…新潟・掛川**
- **2000年度…新潟**
- **2001年度…清水・神戸**
- **2002年度…刈谷・（神戸＝シンポジウム）**
- **2003年度…大分・（両国）**
- **2004年度…伊香保・成岩**
- **2005年度…名古屋**
- **2006年度…フランクフルト**
  6月21日：パブリックビューイング堪能
  6月23日：スポーツクラブ訪問（TGボーンハイム1860）

公開シンポジウムは 2001 年度からやっています。その初年度もここで開催し、コンフェデレーションズカップの総括をして、また 2002 年のワールドカップをホスト国として迎えるにはどうすればよいのだろうか、ということがシンポジウムでした。ワールドカップイヤーの 2002 年は、東京と神戸で行いました。ワールドカップ後は、「地域で支える」をテーマに。その翌年は toto を活かそう。そして昨年はクラマーさんにお越しいただき、そこで約 80 人の参加者がクラマーさんの熱さに触れました。

そして、今年です。今年のシンポジウムは昨年ドイツのフランクフルトで行った出張サロンが関係しています。６月 21 日、パブリックビューイングを堪能し、６月 23 日スポーツクラブを訪問、といった機会を持ちました。このあたりが、今日のシンポジウムの伏線になっています。

ワールドカップの開催都市のパブリックビューイングで飲みながら試合を観戦し、ただ飲みながらドイツを感じたというわけです。（スクリーンの写真を見ながら）こういう顔ぶれです。さらにその後、私はこの場に残って、フランクフルトの橋のたもとでオーストラリア人を見つけて捕まえたら、横にクロアチア人がいたので、さらにブラジルを呼んでこいということで、Ｆグループ集合、というのがこの写真です（本報告書・表紙参照）。

こういうことをしながらも、真面目にスポーツクラブも訪問しました。これはフランクフルト郊外のスポーツクラブを訪問したときの写真です。こういうメンバーでした。さらにそこに辿り着くまでに道に迷ってふらっと横を見たら、こういう人工芝のサッカーとダンスのクラブがありました。こういう施設、環境が至るところにあったのをわれわれは感じることができました。私自身はたった５泊６日しかいなかったんですけど、今日ここにいらっしゃる演者のお三方は、長期にわたって滞在されました。

ここでシンポジストのお三方をご紹介したいと思います。

最初にお話しいただくのが、横浜Ｆ・マリノスの池田誠剛さんです。次に、ドイツ在住32 年のゲームアナリストの庄司悟さんです。３番手は、大会期間中、観戦ツアーを多く企画され、私もこのツアーでお世話になりました株式会社セリエの徳田仁さんです。

さて、少しずつ池田さんの話につながっていくのですが、出張サロン開催中に日本対ブラジル戦がありました。ワールドカップのスタジアムの前にスポーツクラブがありまして、そこにレストランがありまして、観戦に訪れた人をもてなすような施設で、そこでブラジルサポーターやら日本のサポーターがいるわけです。ここで見慣れた後ろ姿がありまして、寄っていって見てみると、ここに池田誠剛さんが来られていたと。

今回のシンポジウムで池田さんにぜひ来て話していただけないかなと思ったのは、ここでお聞きしたことがひとつあります。ドイツにワールドカップ期間中約１カ月間滞在され、育成の環境をつぶさに見てこれらました。それをぜひ報告してくださいとお願いしてありました。

ようやく半年以上経過して、池田さんにこのようなレポートいただける状況になりました。そういうことで、最初の演者であります池田さんにバトンタッチをしたいと思います。では、よろしくお願いします。

ドイツの選手育成から学ぶこと

“地方分権”に根付くスポーツ文化

横浜Ｆ・マリノス　池田誠剛

■なぜ「調整力」が必要なのか

池田：こんにちは。私は横浜Ｆ・マリノスで、育成、フィジカルコンディション、体力向上などの仕事を、小学生から高校生まで、そのカテゴリーにあった目的に応じてやっております。昨年から育成全体を担当するようになりました。Ｊリーグが始まってから昨年までは、トップの選手をずっと見てきました。横浜Ｆ・マリノスに来るまでは、ジェフ市原（当時）で、選手から始まり、指導者になり、フィジカルコーチとなりました。

この間、延べ 250 人のトップの選手を見てきました。試合で勝つための体づくりがメインの仕事なのですが、どうしても変えられない、破れない殻が多く見つかりました。世界と戦うためにどうやってレベルアップしていくかを考えると、最終的には「育成段階」でやらなければいけないことが山ほど出てきたわけです。

そのひとつに、コーディネーションがあります。皆さん、一度は聞いたことがあると思うのですが、日本語でいうと「調整力」が一番適している言い方と思います。コーディネーション・トレーニング、コーディネーション能力の向上がキーワードです。これは、ある目的を達成するために、どのようにスムーズに、なおかつ早く、エネルギーロスを最小限に抑えながら、目的を達成できる身体の巧みさ、使い方を得られるかということです。

例をあげると、日本のチームがヨーロッパや南米へ出ていって試合をするとき、善戦している試合のほぼすべてが、天気の良い日、ピッチコンディションの良い日なのです。ところが、日本代表がフランス代表に一度ボコボコにされたことがありましたが、そのときのようにピッチが軟弱で、天候の悪い状態になりますと、足を取られてどうにもならない。ところが一部の報道では、この原因を「筋力が弱い、パワーがない」からと結論づけられてしまっている。しかし、決して力だけで培われるものだけではありません。選手たちは、日本の気候で、良いサーフェスでプレーする状況で育ってきています。土の硬い校庭や、体育館、あるいは人工芝のような環境でプレーする選手たちは、雨でぐちゃぐちゃの状態のなかでサッカーをする機会が少ないのです。

雨で下が滑るグラウンドで身体のバランスをコントロールする、維持する経験があると、

それなりに神経系が発達します。だいたい 10 歳から 12 歳から成人になるまでの間に神経系の発達がピークに達するのですが、その年代までにいろんな悪条件下で身体を動かすことが必要なんです。

コーディネーションをテーマとして昔から取り上げていたのは、旧東ドイツです。旧東ドイツは、ご存じのように、ドーピングなどのネガティブなイメージで捉えられがちですが、実際のところ、それは彼らが行き着いたひとつ手段であって、そこに辿り着くまでは国を挙げて大がかりな強化を行っています。私は、トップの仕事をしている間、スケジュールがどうにもならずに海外になかなか行けなかったのですが、今回かなり時間をいただいてドイツの東を目指して行ってきました。クラブには迷惑をかけたのですが、1 カ月ちょっとの期間でした。

ここでコーディネーションの蘊蓄を並べても、あまり興味のない方はつまらないと思いますので、もし要望がありましたら、日をあらためてお話したいと思います。それ以外のところで、今回ドイツへ行って感じてきたこと、見てきたことを簡単に話したいと思います。よろしくお願いします。

■約束を守るドイツ人

ドイツ人は、日本人に非常に似ているなと感じました。まず、彼らは約束を必ず守ります。イタリア人とアポイントを取っても集合場所で顔を合わせるまで絶対に信じられません。何度もそんな目に遭いました。ビッククラブでも、行ってみたら、「申し訳ない、今日は駄目なんです。日をあらためて来てください」ということがあるのです。ところがドイツは１カ月、２カ月前にアポイントを取っているのに、約束が守られます。ドイツでサポートしてくれた方に「心配だからアポイントの確認を取ってほしい」と頼むと、絶対に彼は来る、と言うのです。まだ駄目だという連絡が入っていないから、都合が悪くなっていないから来る。私も最初は不安で不安でしょうがなかったのですが、今回ドイツでいろいろな形でサポートしてくださったドイツの方で、誰一人としてドタキャンする人はいませんでした。海外に出て初めての経験です。

浦和レッズがバイエルンと業務提携をしましたが、ドイツのクラブと提携するとき、そういう部分で計算、プランが立てやすい。信頼感があり、日本人とよく合うのです。道に迷うと必ず助けてくれる。小さな子どもからお年寄りまで、気軽に声をかけてくれるんです。それはワールドカップ期間中だからかというと、決してそうではないと。そういう意味でも非常に感激しました。

ドイツは、9 つの国に囲まれているので、ワールドカップ期間中の人の出入りがすごかったです。（写真を見ながら）これはオランダのサポーターの人波なんですけど、信号が赤から青になろうが、全然進まないんですよ。もう、ただただオランダ人がダーッと。それも

スタジアムの方向ではなくパブリックビューイングの方へ。とにかくすごいわけです。映像でお見せできないのが残念なくらいです。とにかく強烈でした。今回の開催国のオランダだったっけ？　と思ったくらいです。

大会の開会式の中で印象深かったのは、歴史の中で優勝してきた国々が、優勝経験のある代表選手がその国を代表して、優勝した年のプラカードを持って出てきました。皆さんも映像でご覧になったと思いますが、これにはビックリしました。すごく印象深かったです。

■優勝した 90 年イタリア大会後に育成プログラムがスタートした

さて、きょうのお話の核心というか、サッカーに方向転換したいんですけれど、ドイツ訪問時に何人かの指導者の方々とお会いしました。皆さんに共通していることは、90 年のワールドカップ・イタリア大会で、フランスやオランダは大型でありながら敏捷性や調整力が高い。だが、ドイツは同じような体格でありながら、そうした能力が非常に低かったと。それに危機感をもって、ドイツサッカー協会が育成プログラムをしっかり立てようと、育成分野の強化が始まったらしいのです。

今回のワールドカップで活躍したラーン、メルテザッカー、ポドルスキー、シュバインシュタイガーなどがこの第 1 期生で、彼らが 12、3 歳のころからスタートしたみたいです。ポドルスキーなんかは、アンダー18、21 ぐらいから代表に入っちゃった、飛び級で上がった選手もいます。そういう選手たちも含め、今回ドイツが、みんながびっくりするような勢いで大会を盛り上げました。そこにはそれなりのバックグラウンドがあったということです。

それまでのドイツ選手の課題とされていたのは、オランダやフランスの選手と同じような背丈、体格なのに、スピードがない。ゲームにインテリジェンスがない。そしてコーディネーションがない、ということでした。なぜコーディネーションがないのか。コーディネーションが進んでいたのは、ベルリンを中心とする東ドイツであったのに、なぜなのか。いろいろ話を聞いてみると、西と東はライバル関係にあって、お互いを認めたくない。お互いに、西が中心だ、東が中心だと言い合って、指導者レベルの交流がほとんどない。ということで、西は東の研究成果を全然取り扱っていないのです。

フィジカルトレーニングというと、エネルギー系です。簡単に言いますと、持久力をつ

けたり、パワーをつけたり、そういう体力的な面を向上させることが中心です。かたや東ドイツは、もっと緻密に身体の動きやコーディネーション能力を捉えて、それに応じたトレーニング施設を持っています。小さいエリアで、お金がないところで、あれだけオリンピックでメダルを取れる大国になっていたのです。

■地方分権の文化がサッカーにも影響している

ドイツにはスポーツ以外にもいろんなクラブがあるらしいです。音楽関係のクラブもたくさんあります。特にその中でも人気があるのは、スポーツクラブ、スポーツシューレです。クラブが国民の生活習慣の中に根付いています。だいたい金曜日の午後は休みなので、土日と併せて、週に 2．5 日の休みがある。仕事もだいたい夕方 5 時には終わり、残業もほとんどない。子どもは 1 時ぐらいには学校が終わります。どんなに遅くても 2 時半くらいまで。お昼はほとんど家で食べます。学校は机に座って勉強するだけの場なので、お昼を食べた後、体を動かしにクラブに通う。そういうバックボーンがあって、スポーツクラブの存在がドイツ国民の生活に浸透している。

僕も数字を聞いてびっくりしたんですけど、ドイツのクラブにはいろんな競技があるんです。その中でサッカーという競技ができるクラブが、ドイツ全土で 2 万 5 千、すごい数です。ドイツサッカー協会に登録している選手数は 600 万、それ以外に登録していないけれどサッカーをしている、いわゆる草サッカー人口が 400 万。桁が違うんじゃないかなと、初めて聞いたとき思わず聞き直したくらいで、それだけの大きなニーズがある。

ドイツが日本と根本的に違うところは、ドイツは地方分権国家であるという点です。主たるところはもちろん国がコントロールするんですけど、教育文化に関しては州がコントロールしている。教師のライセンスも州によるもので、他の州では認められないらしいです。その州だけの世界がある。サービスを地域に還元している。

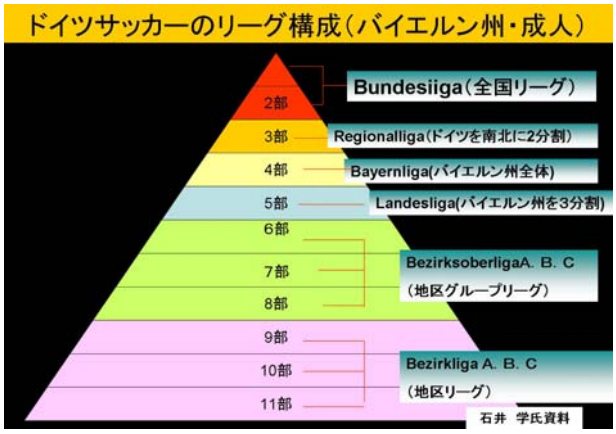
ドイツには全部で 16 の州があるんですが、サッカー協会は、バイエルン州なんかはそうですけども、州によってはひとつだけでなく複数の協会を抱えている州もあるので、独立した 21 のサッカー協会がある。そのサッカー協会の中で選手や指導者を育てるんだそうです。日本でいえば、いま全国に 9 地域ありますね。そこは日本のサッカー協会の中の技術委員会というところに全部集められて、そこで指導されたマニュアルを落とし込んでいくというスタイルをとっています。こういう日本のスタイルで言い換えれば、9 地域が独立しているということです。北海道と九州とでは気候も違うし、土壌も違うだろう、というのがドイツの方の考え方です。北海道には北海道に合ったサッカーの教え方があるし、スタイルがある。スキーができたり、スケートができたり、他のウインタースポーツがあるのに、なんでそれを取り込まないんだ、という形で類型化されて、存在している。たとえばこのバイエルンのサッカー協会は、会員が 160 万人で、約 5000 クラブある。子どもたちのクラブ、小さいクラブもあわせると 2 万 5 千チーム。これは協会の中でも最大で、バイエ

ルンサッカー協会は最大の協会です。

では、ドイツサッカー協会は何をしているのでしょうか。彼らはブンデスリーガの運営、コントロールをし、代表チームをサポートします。はっきり分かれているわけです。そういう文化です。

■アマチュア選手にも経費が支給される

簡単ですが、これがドイツ成人の 10 部ぐらいまでのリーグ構成です。これがバイエルン州です。レジオナルリーガというのは、地域リーグのことで、南北に分かれて、この 5 地域というのは別の区分です。4 部、5 部がオーバーリーガにあたる州リーグです。バイエルン州は大きいのでひとつのリーグを持っているんですけど、他の州は全国を 5 分割して、4 州ぐらいで 1 つのリーグを構成しています。その下に地区リーグがあり、その下にまた地区リーグ。アマチュアといわれるのは 3 部から下です。ほとんどがアマチュアです。だいたい 6 部リーグくらいまでは、だいたい月々8 万円くらいのお金がもらえるそうです。少ない額ですけど、アマチュアといいながらも栄養費とか、交通費という名目です。とてつもない組織力です。



これは育成のカテゴリーについてです。日本の場合は、小学校の低学年、高学年、中学、高校というように、すごく大雑把なんですけど、ドイツの場合は 2 歳刻みです。育成年代では 1 歳の成長過程の違いがかなり大きいということで、最大限 2 年間の違いまでを 1 つのカテゴリーにしようということです。A ユーゲントというのはU－17、18、19 で、それ以下は全部 2 歳刻みとなっています。

次の資料は石井学さんにご協力いただきました。石井学さんはバイエルンのオーガナイズをして、選手あるいはチームの面倒を見ている方です。ブンデスリーガはもちろん成人のリーグです。レジオナルリーガは、先程申し上げたとおり南北に分かれていて、これも

German League Category							
	19-	17-18	15-16	13-14	11-12	9-10	6-8
Bundesliga	○						
Regionalliga	○						
Ober	○	○	○				
Bezirksoberliga	○						
Bezirkliga	○	○	○	○			
Kreisliga		○	○	○	○		
Gruppenliga					○	○	○

成人です。オーバーリーガといって州単位のリーグになると15歳以上の大会があります。地域でも、地域をグループに分けると成人のリーグです。その下の地域、住んでいる地域ごとに分かれると、もうひとつランクが下がって13歳以上、以下のカテゴリーにリーグ戦があります。クライスリーガというのは子どものリーグのカテゴリーになります。これは、日本でいう町内リーグみたいなものです。その上は市民リーグ。下にいけばいくほど、大きなくくりではなく、近いところにあるクラブ同士でリーグ戦を行う。遠征とかで無駄な経費を使う必要はない。まして全国なんてナンセンス。全国リーグにすることによって勝利至上主義に陥ってしまい、子どもたちの育成に悪影響を及ぼすんじゃないかという考え方が背景にあります。

■工夫を凝らした育成設備

いくつか育成に力を入れているチームと、トップに力を入れているチームを見てきたので、簡単にご紹介します。

カイザースラウテルンというチームには、育成専用のグラウンドがあります。ここは昔米軍が駐留したときに使っていた地区をグラウンドにしたものです。カテゴリー9、10、11はコーチ3人、12、13はコーチ2人と、指導者が少ないんですね。日本の場合は各カテゴリーに1人が付くくらいの手厚さというか、そういうスタイルをとっているチームがほとんどです。あるいは1つのカテゴリーに2人、3人が関係している。ドイツはコーチがひとりでいくつものカテゴリーを兼任しているような形です。実際には、コーチのほかに用具や遠征の手配をするアシスタントはひとり付いています。しかしこのスタッフでだいたい200人くらいの子どもたちを見ています。

このクラブは、コーディネーション・トレーニングにすごく力を入れています。天然芝で3面の広いコートがあります。クラブの育成統括部長は、日本でいうS級を持っていないとトップにはなれません。これはまた日本と違う。日本の場合、S級はJリーグの1部、2部の監督になれる資格です。カイザースラウテルンでは育成の指導者の責任者もS級を持たなければならなりません。

これは丸太の上を歩いてきてジャンプしていくような設備があります。小さいときよく遊んだようなものです。競争するらしいです。走ったりしますが、地面にはウッドチップが敷き詰められていて、柔らかくできているんです。この柔らかいというのが、先程申し

上げた天候の悪い軟弱なグラウンドでバランスを崩さないで、というようなところにつながっているような気がして見ていました。すごく柔らかいんです。

これはバウンディングするところです。右に左にジャンプしたりする。ここはスラロームです。これはハードル。これらの設備はすべて木製です。自然のなかでトレーニングするという雰囲気をつくりたい。これは反復横跳びとかサイドステップとか、いろんな使い方があります。これは、この中で鬼ごっこするんです。捕まらないようにこの中を走り回るらしいんです。砂場のフットサル場もあります。ビーチサッカーですね。私もクラブハウスやトレーニングフィールドを作るときは、必ずこれを入れてほしいと思っています。土地の問題もあると思うんですけどね。これがバスケットボールコートです。向こう側にあるのがフットサル、サッカーテニスというバレーボール、あるいは足でやるテニス。このようにサッカー以外の競技も取り入れるようになっています。これは正式なタータンコートです。このクラブは昨シーズンは 1 部でしたが、今シーズンは 2 部に落ちちゃった、そんなチームですらこういう施設があるというのはびっくりしました。こういうウェイトトレーニングはAユーゲントの選手が使う。ただ筋肉をガーとつけてやるのは絶対に駄目です。

次はマインツ、MAINZ と書きます。小さいクラブで、こじんまりしています。ここはトップと育成が兼用で施設を使っています。フルコート 8 面です。ＢＦＣというのはビーチフットボールコート、要するに砂場ですね。ＦＴＣというのはフットサル、フットテニスコートで。ここは、230 人くらいが育成のために在籍しています。ここはコーディネーション・トレーニングの専任の講師を雇っています。スタジアムは大きくはないんですが、すごくコンパクトで、雰囲気がいいところです。ほとんどトップ選手が使っています。これは、レカロシート、飛行機なんかのファーストクラスに使われるようなベンチです。日本ではプラスチックのベンチに座っていますけど、これはかなり座り心地がいいんです。たぶん控えの選手が増えるんじゃないかなというくらいにいいです。

■地域の社交場としてのクラブ

クラブのレストランは社交場なんです。どのクラブでも、たとえ小さなクラブでもそれなりのお金を掛けているんです。個人事業主の方が自治体から権利を買い取ってやるケースと、クラブにお金を払っているケースと、いろいろあるんです。いずれかの形で運営されています。子どもを連れてきて、時間つぶしに一杯やる。ビールは水代わりに飲んでいます。ここは２階建ての素敵なレストランで、しっかり作られています。

これはフットテニスの写真です。ここはグラウンドの周りにウッドチップが敷き詰めてあって、子どもたちはここをクロスカントリーで走っています。練習の終わりに、「今日は何周」とか言って、走っています。この子は７歳、小学校の１年生か２年生です。これはコーディネーションとして、使っています。ジャンプをして、ボールを使ってドリブルをしています。必ずボールを使ってトレーニグをしています。そんなにお金を掛けないです。日本みたいに同じものを着たりはしないんですよ。もう、好き好きなものを着ています。すごく新鮮でした。

これは、アイントラハト・フランクフルトです。高原が在籍しています。育成にはそれほどお金を掛けていないです。トップチームに力を入れているところは、ほんとのビッククラブ以外は、トップにお金を使っていると、どうしても育成費は削減しなければならない。通常、クラブの運営費の 10 分の１が育成に当てられる。日本でも、10 分の１が人件費や遠征費すべてを含めて、10 分の１でバランスを取っている。ここは、場所的に移民の方々が多いみたいで、ここの育成も、ドイツ人は３分の１しかいなくて、スペイン人やトルコ人、もちろん韓国人もいます。その関係で、かつて韓国の車範根もいたし、高原も入りやすい環境にあったんじゃないかと思います。総合スポーツクラブとしてすごく力を入れていて、12 種目のスポーツがあり、会員も 2600 人にいます。すごく大きいクラブです。

ボルシア・メーヘングランドバッハ、ここは僕らがちょうど中学生くらいの頃に夢こがれたチームで、すごく強かったです。ここは２年前にスタジアムの周りの施設を改修して、素晴らしい施設に生まれ変わりました。トップと育成が兼用していて、スタジアムの中に全部のロッカールームがあります。先程ご説明したカテゴリー別にすべて扉があって、自分たちの部室、という感じですね。いいなーと思いました。

ここの特徴は、ボルシアの周りにあるクラブと提携しながら、助け合って、地域ぐるみで良い選手を育てよう、そういう活動を積極的にやっているクラブです。これが外観です。エントランスがきれいです。これが U-19、Dユーゲントの扉です。それが、B、C、Dとあります。こちらがマックスさんといって、若いながら育成の統括部長です。ブンデスリーガで、13～４年間プレーしていました。良くしていただいて、いろんな話ができました。

それで、パーテーションで区切って、ここはAユーゲント、B、Cというふうにきれいに分けています。非常にドイツ人らしいです。これはトレーニングルームです。

■ワールドカップでドイツがひとつになった

ドイツ代表の活躍で、真のドイツ統合が見られたかなという感じがしています。クリンスマンが監督は、アメリカに住んで、まともにドイツ国内にいない、そんな監督がチームを率いても駄目だろう、というのが大会前の下馬評だったんです。ところが、一次リーグを勝ち上がって、決勝トーナメントに進むにつれて、国中にどんどんどんどんドイツ国旗が増えてきました。ベスト16のスウェーデンに勝った後、もうワーっと盛り上がって、ほとんどの車の窓ガラスに国旗が貼り付いていたり、家には必ず国旗が掲げられていました。それを見ているだけでもお祭りを体感できました。国旗が売り切れたという話も聞いたくらいです。ベスト8でアルゼンチンに勝ったときは、もうほんとに大変でした。 “All Together”という、「みんなで行こうよ、みんな一緒だよ」というキャッチフレーズが評判がよくて、それはアディダスが作ったんですけど、みんながそのフレーズの入ったシャツを着て歩いている。そのとき僕は、ドイツが本当の意味で統合したのかな、と感じました。それまでは東と西では全然街の雰囲気が違うし、ベルリンの壁がなくなったといっても、市内からちょっと外れるともう見るに耐えない、誰も住んでいないようなビルが沢山あるのです。非常に地域差があると感じていました。最後は、ベスト4で負けてしまったんですけど、翌朝からベルリンの広場に人がどんどんどんどん集まってきて、10万人くらいになりました。感動しました。

これがベルリンの壁で、まだ残っています。僕の髪の毛もまだちょっと残っているんですけど（笑）。

ここはライプチヒ大学です。ここにハルトマン教授という方がいます。その人が、いまコーディネーション関係の研究で、世界で一番じゃないかと思います。もちろんいろんな方がいらっしゃいますが、若手で、いろんな新旧の情報を持っています。

コーディネーションは神経系の分野なので、理論的に分かりやすく説明するのが難しいです。私もずっといろんな本を読んだり、話を聞いたりしてきたんですけど、何か釈然としないことがあって、すっきりしなかったんです。ところがハルトマン先生に会って、お話を聞いたら、もういままでの疑問がすべて解けたという感じです。文字にするのは難しいんですが、それが今回のドイツ訪問の一番の収穫でした。

これはキンバームといって、ベルリンの郊外にある、旧東ドイツの秘密のトレーニングセンターです。今でもトレーニングセンターとして、外部からいろんな団体を受け入れているんですけど、一番奥にこういう建物があります。ここは高所トレーニングの設備で、建物全体を密閉して空気を薄くしてあります。これは、トレッドミルという、ベルトコンベアの上を走るものです。よくスポーツジムでもありますよね。その上で、どれだけの酸素が吸えたのかとか、どれくらいのスピードで走れたのかと測定する。

これは、プールです。水を張って、この中で泳ぎながらマスクをつけて。これは、自転車です。この建物自体が、高所トレーニング用に全部できているのです。こういうところから、そういう選手が育っていくのです。

これは、決して横になっているわけではなくて、旧東ドイツの研究者の方が開発したケンタウルスという名の、腰を固定して、ずっと回っていくんです。逆さになったり、横になったり。そうやって腹筋、背筋の、要するに体幹と言われるところの筋力を測定するのです。

■一体感がなかったブラジル

これは私の専門です。ワールドカップの 17 試合を見て、ウォーミングアップでどんなことをしているのかを見ました。94 年にブラジル代表チームに 2 カ月帯同させてもらって、アメリカ大会を見ました。その後も、98 年、2002 年と、ずっと追いかけてきました。

一番変わってきたのは、ウォーミングアップを選手に全部フリーでやれと投げていたチームが回を増すごとに減っていったことです。今回、スイスはフリーでやっていましたが、チーム単位でまとまってやったところがほとんどです。コーチではなくて、選手がコントロールをしていたところはオランダ。コクーという選手がリーダーシップをとって選手全員をコントロールしていました。他のチームは、フィジカルコーチやテクニカルコーチがやっていました。やり方は、だいたい初めの 5 分くらいフリーです。そして一度集めて、そこで一緒にボールを使って、いろんな動きをやります。そこからもう一度フリーにして、最後にもう一度集めてダッシュして、ジャンプして、上がる、という流れです。

私がさすがだな、と思ったのはフランスです。専門的な話になりますが、ストレッチには 2 種類あります。スタッティック（静的）は、要するにじわーっと伸ばすストレッチです。もうひとつは、ダイナミックストレッチ。これは反動をつけるやり方です。腿の裏を伸ばすにしても、反動をつけながら伸ばします。静的なストレッチをすると筋が逆にゆる

んじゃうんです。ゆるんで、パフォーマンスが落ちてしまう。フランスはスタッティックなストレッチは 1 回も入れなかったです。跳んだり、切り返したり、ストレッチをするときも必ず反動をつけています。すごく理にかなったやり方ですね。逆にパラグアイ、コスタリカ、エクアドルなどは南米で情報が入りづらいのか、せっかく体が温まってきているのに、ずっと 1 分間くらい伸ばしている。そういうチームも目に付きました。

かつてチーム全体が連帯感を持ってやっていたのは、ブラジルです。そのフィジカルコーチはモラシーさんといいます。94 年のアメリカ大会のときはお世話になりました。これはロナウドです。アメリカ大会のとき、彼は 17 歳だったです。「覚えているか」と言ったら、「覚えている」と。では「どこで会ったか覚えているか」と言ったら、「アメリカのとき来ていただろ」と覚えているのです。それで「お前変わったな、髪がなくなったな」と言われて、僕も「お前も変わったな、太ったな」と言ったら、2 人で笑いましたけど。とにかくロナウドは、非常にコンディションが悪くて、新聞でも散々書かれましたけど、モラシーが言っていたのは、レアルの選手はみんなひどかった。やはり、あそこはビックネームの選手が集まっているので、トレーニングで追い込めないらしいのです。そうなると、どうしても選手の自己管理に任せてしまう。絞る選手は絞っているんだけど、絞れない選手はどんどんどんどん太って、体調を崩してしまう。ロベルトカルロスもそうですし、レアルから来た選手はトレーニングの初の 1 週間はずっと別メニューだったみたいです。このときもロナウドは、他の選手は午後練習 1 回だけなのに、午前中、午後モラシーが付きっきりで自転車でトレーニングをしたり、ウェイトトレーニングをやったりしていました。

そこで私が「一体感がないんじゃないか」とモラシーさんに言うと、「お前もそう思うか。そうなんだよ」と答えが返ってきました。94 年のアメリカ大会のときはロマーリオがいましたけど、全体がすごくまとまっていました。かつて鹿島アントラーズでプレーしたレオナルドが、この大会のアメリカ戦で肘打ちによって退場して、ブラジルは残り時間を 10 人で戦ったのですけど、10 人で戦っているような感じが全然しませんでした。非常に連帯感があったのです。ロマーリオは自分勝手にいろいろやっていましたけど、全体はすごくまとまっていた。ゴールしたら必ずみんなベンチに行くんですよ。ベンチに行って抱き合って、喜んでベンチと一体になります。それが今回、ビデオなど見ていただけると分かるのですが、点を入れてもベンチになんて行かないときが結構あって、そういうことから今回はちょっと違うと。それでビックスターが多すぎると思います。ロナウド、ロナウジーニョ、カカー、ロベカル…。そういうときに勝つのは容易なことではありません。フランスを甘く見て、ひねられちゃったということです。

ということで、ご静聴ありがとうございました。

中塚：ありがとうございました。大会期間中のドイツを回って来られて、特に育成環境を中心にお話をいただきました。時間が限られているのですが質問がありましたら、1 人、2 人はお受けできると思うのですが、いかがでしょうか。

質問：日本チームのウォーミングアップはどのように感じられましたか。

池田：私は良かったと思います。ただ、ウォーミングアップというのは非常に難しいというか、選手の気持ちひとつでどうにでもなるんですね。外から見ると何かダラッとしているなというウォーミングアップがありますよね。やっていることは一緒なんですが、選手が、試合に対して、あるいは相手チームに対して、どれだけ気持ちが入っているかというところが一番大事なところです。僕はウォームアップの形態は、まったく逆なことをやらない限り何でもいいと思うんです。今回日本の試合を全部見ながら、その気持ちの部分が、後の試合になればなるほど薄れちゃったかな、と。特にクロアチア戦前のウォーミングアップは、もしご覧になっていたら、私と同じ感想を持たれたのではないかなと思います。やる前に、もう無理だなと思ったんです。この試合はきついなと。そんな感じでした。よろしいでしょうか。

中塚：では、後ほど全体でのディスカッションの場もありますので、質問があればそちらでお願いします。ありがとうございました。

ゲーム分析に見る現代サッカーの真相

データは語る、イタリアの成功・日本の敗因

ゲームアナリスト　庄司　悟

中塚：２人目の演者は庄司さんです。ワールドカップ・ドイツ大会後の昨年 8 月、きょうもいらっしゃっている、庄司さんの母校でもあります、東京の海城高校の半澤先生から、「自分の学校の卒業生で、74 年ワールドカップでドイツに行って、そのままドイツに滞在し、面白いゲーム分析をやっている面白い人間がいる」と。たまたまいま８月の末に日本に来ているので連絡を取ってみないか、と言われまして。それで「いきなりサロン」ということで、庄司さんを 10 人くらいで囲む小さなセミナーをやりました。ゲーム分析の手法がいろいろとあるのですが、見させていただいてびっくりしました。

どのようなゲームの切り取り方があるのか、そこから何が見えてくるのか。そのあたりの面白い話が聞けるでしょう。庄司さん、よろしくお願いします。

■ドイツのとの出合いは 74 年ワールドカップだった

庄司：みなさんこんにちは。最初はドイツ語で挨拶くらいしようかなとか、いろいろ考えていたのですが、マイクもないし…。本題に入る前に、中塚理事長からリクエストがありまして、なぜドイツに居残ってしまったのか、なぜアナリストなどとたいそうな肩書きを付けたのか、それらを説明しなければいけません。

昨日、甲子園の選抜高校野球の開会式の挨拶を聞いていましたら、今年から出場選手全員が平成生まれだということで、きょうこのサロン 2002 のシンポジウムでお話しするとき、何を基準にして話をしたらいいのかな、と思いました。74 年のワールドカップといっても実際に見た人がどのくらいいるのか…。日本でワールドカップといえば 98 年くらいからなと。でも、中には牛木素吉郎さんみたいに 70 年のメキシコ・ワールドカップをご存じの方もいらっしゃるし。どこが基準になるのか、ちょっと不安なんです。だから 74 年にドイツに行ったまま 30 年もへばりついちゃったというのは自慢にならず、本当の好き者で、ひょっとしたら 30 年のうち３分の２くらいは牢屋に入っていたんじゃないのか、などと思われる可能性もあるのですが…。

詳しく説明しますと、73 年７月に、授業中に新聞を読んでいましたら、「来週、ワールドカップのチケットが発売になる」という小さな記事を見つけまして、面白いから買ってみ

ようと思いました。早速日本サッカー協会に電話で問い合わせたのですが、「分からない。ひょっとしたら航空会社のルフトハンザが発売するかもしれない」ということで、数週間、ルフトハンザの事務所と協会の間を行ったり来たりしました。最終的にルフトハンザが発売するということがわかったので、「普通の人でも買えるのですか」と質問したら、「うちの飛行機を利用してくれる方に限定します」というので「航空券はいくらですか」と聞いたところ、「45 万円」だと。それは無理だと諦めていたら、その後営業部長の方から電話が来て、「チケットが売れ残ったからお分けできる」と。「開幕戦や、準決勝、決勝のチケットはあるのですか」と聞いたところ、「立ち見だけど、全部ある」ということで、開幕から決勝まで日程的に見られる 12 試合分を、合計２万４千円で買いました。その金も借金でした。

当初は手に入ったチケットを毎日毎日眺めていただけなのですが、その年の 12 月に大会の組み合わせ発表を見て、いよいよ本当にその気になって、本格的にアルバイトを始めてお金を貯めて、親からも借りて…。当時、渋谷にあった国際学生何とか、というところでＩＤカードをもらいました。飛行機はエアフランスで東京ーパリが 13 万円でした。

74 年５月 31 日、現金 20 万円を持って、リュックサックにニッカボッカに登山靴という姿で、ドイツに向けて出発しました。決勝のあった 7 月 7 日の１週間後までドイツにいました。もちろん、ホテルに泊まる余裕はなかったので、ユースホステルに泊まって、あとはユーレイルパスを十二分に使い、夜行列車をうまく使って節約しました。試合前日に夜行列車でわざわざ試合会場から遠く離れた町まで行って、翌朝そこに着いてから試合会場の町まで引き返す、というやり方です。列車の中で寝れば宿泊代を浮かすことができるというわけです。ユーレイルパスで一等車に乗れましたので、結構楽に移動できました。

そうしてワールドカップを 12 試合見て、バカになったんですね、やっぱり。サッカーバカというわけではなかったのですが、どう言ったらいいのか…。なにせ初めての外国で、サッカーバカが集まっている中で、リュックサックにボールを１個ぶら下げていると、みんな友だちになっちゃうわけです。ドイツ人も非常に親切でした。というわけで、帰国しても１年経くらいは、考えていることはほとんどドイツのことばかりなんですね。それで、親をだまくらかして、２年間だけドイツに行かしてくれと頼みました。ドイツ語を勉強して、指導者のＢライセンスを取って帰ってくるからと。たまたま運よくゲーテ・インスティテュートでドイツ語を勉強できて、ワールドカップの時に知り合った家族のところに半年間居候しました。しかし、その時に出会った人が「ドイツ語を勉強してＢライセンスを取るなんてバカらしいからやめろ。それよりもケルンの体育大学に申請を出して、体育大の学生になった方が、きちんとドイツにいられるし、その方が滞在許可ももらいやすい」と言うので、急遽日本から書類を取り寄せて、申請を出したら、通ってしまって。入学許可をもらって１年半ドイツ語を勉強してやっと正学生になりました。体育大のサッカー専科というのはないのですが、専門でサッカーをやるというところに入ったんです。その時の同期だったのが、今年１月にグルノーブルに行ってしまいましたが、ジェフ千葉の祖母井秀隆でした。

学生として普通に学校に通いながら、ときどき「サッカー・マガジン」にドイツの様子をレポートにして送っていました。それと同時に、やはり生活費を稼がなければならないので、サッカースクールをやりました。当時住んでいたデュッセルドルフには 8000 人ほど日本人が住んでいまして、日本人学校の生徒が 900 人くらい、その半分が男子生徒でした。その子たちを集めてサッカーを教えたのです。ドイツに行って、サッカーの勉強をしながら、生活費を稼ぐのもサッカー、ときどき原稿を書くのもサッカー、ということで、そういう環境の中で 10 年、20 年と経ってしまいました。

■なぜゲーム分析を始めたか――高原が使われない「必然」というものがある

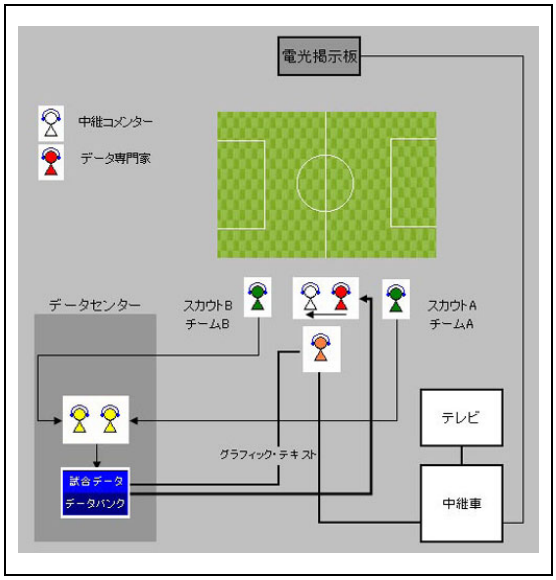
きょうのテーマは、サッカーのゲーム分析です。

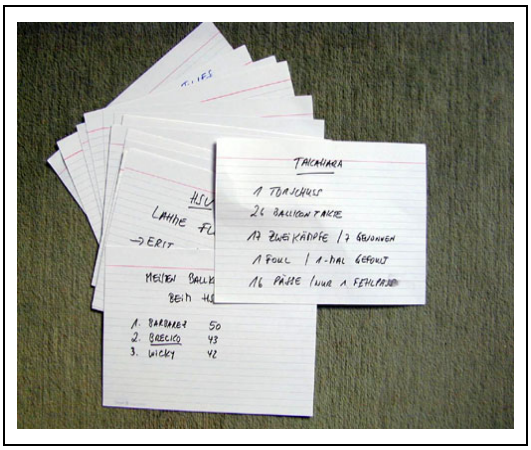
始めたきっかけは、高原がハンブルクに来たことでした。実のところ、きょうのメインテーマのひとつは、ドイツのメディアと日本のメディアを比べることです。2003 年１月に高原がハンブルクに来たとき、日本の報道陣を報道するドイツのメディアが非常に面白かったのです。「きょうは記者が何人で、カメラは何台」というような報告が、ドイツの雑誌や新聞を賑わせました。そういう中で、ニッカン、サンスポ、スポニチなどが高原を記事にするわけですが、こういうことしか書けないのかな、と思って読んでいました。そこで、切り口を変えて何か書けるのだろう、本当に高原ってハンブルクで活躍できるかな、どう評価されているのかな、ということを考えました。

高原がハンブルクにいる間に、監督が 3 人替わったんですけど、高原が来たときはヤラというオーストリア人の監督でした。その監督の歴代の先発メンバーとシステムを全部洗い出して、ホームのときはこういうシステムを、アウェーのときはこういうタイプの人間を使うのかというのを、過去２年か３年か遡って全部整理したんです。それから、ヤラが辞めてトップメラーが監督になった時にも、彼がハンブルク以外のところでやっていた、彼の癖を全部調べた。そうすると、各監督が高原をどういった目的で使いたいのかが見えてくる。彼がお呼びでない時間帯と、お呼びでない試合というものがある。だから彼が出なくて当然だよな、という試合がだんだん見えてくるようになる。でも日本では「出番なし」とか「残り 10 分しか出ていないので、彼は頭にきて、ふて腐れている」というような書き方しかしていない。でも、こういうデータがあったら一目瞭然じゃないのか、という考えがゲーム分析の始まりだったのです。

■ドイツ･メディアの義務感がデータの活用を生んだ

これはワールドカップのデータです。データがどういう形で、何に利用されているかを示したものです。サッカーのピッチがありまして、ここにはテレビの実況担当のアナウンサー１人がいます。その隣にオペレーターが１人いまして、その両脇にいるのが、ドイツではスカウトと呼ばれ、A チーム担当、B チーム担当です。この２人は実況で、ピッチで起





きているデータをデータセンターにいるオペレーターに送ります。データは速記で入力されてデータバンクに入り、整理された結果が実況のところにいるオペレーターのモニターに上がってきます。

これが、実況の隣にいる人に上がってくるのがこの画面です。

これがチャンピオンズリーグのグループリーグ、バルセロナーチェルシー戦のものですが、こちら両チームの登録選手全員ですね。

これは個人の数字です。後でグラフになりますので、よく覚えておいてください。これが、ゴール、アシスト、シュート、ラストパス、ＢＫとはボールコンタクトの意味です。１対１の勝率、１対１の勝ち、負け。これは各選手全部つくってあります。ここにそのチームの合計の数字が出てきます。これが、チェックポイントが書いてある３ページです。これが先ほどのモニターのところに出てくるのです。

ここに「高原」と書いてあります。オペレーターがデータをゲーム中にチェックをして、何か変わった数字があったらこのメモ用紙に書いて、実況担当に渡すんです。そうすると、実況の人間はあたかも自分が勘定したかのように、「高原、前半シュート１本、26 回球に触って、１対１が７勝 10 敗だった。ファールが１回、されたのが１回、パスのトータルが 16 本でうち１本だけがミスパスだった、などとコメントします。こういうデータが実況担当に流れていくのです。

つまり、日本のプロ野球のラジオ中継に近いことを、この２人がやっているんですね。日本の野球と同じで、ドイツのサッカー・メディアもラジオから入っていますし、ラジオから始まって、時代がテレビになって、テレビは動画ですから、みんな見ていれば何にもしゃべらなくてもいいだろうと思ったら、そうはいかないのです。

先ほど池田さんのレポートにもありましたが、クラブに所属しているサッカーをプレーする人が 600 万人、所属していなくてもプレーしているのが 400 万人、約１千万人がサッカーを実際にやっている。プレーせずに見ているだけの人も入れれば少なくとも 2 千万人がＴＶ中継を見ているのに、こういうデータを出さなかったら大ブーイングが起きます。ドイツのＴＶメディアは、いかに質の高い放送内容でゲームを見せるのかという、その義務感がものすごく強い。ですから、こういうデータをゲーム中に提供する、見やすいよう

にちょっとしたグラフ化して流したりしている。結局はメディアが視聴者の方から押されて、こういうデータを提供せざるを得ないんです。

このデータを取っている会社は各クラブと契約しています。データに基づいて専門家が整理・分析をして、試合の２日後に 50 ページのレポートとして各クラブの監督さんの机の上に乗るのです。ドイツにはこうしたスカウティングを受けている会社がいくつかあるのですが、その会社のご厚意で、私はブンデスリーガ、チャンピオンズリーグ、ワールドカップ、ヨーロッパ選手権などのデータを、こっそりと覗くことができるという、非常に恵まれた環境にあるんです。このデータを、最初のうちはジーッと眺めていたんですけれども、これをもっと面白く見られないだろうかということを考え、ない知恵を絞りました。

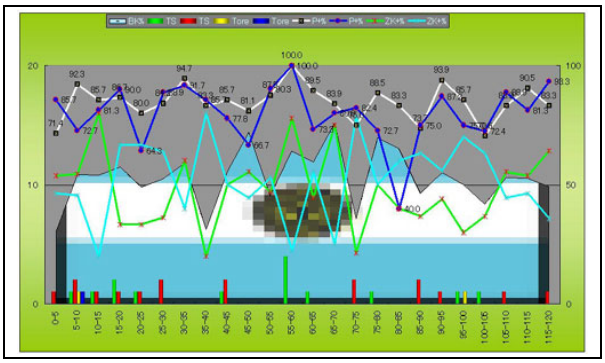
■試合を分析するための３つのファクター

これは先程お見せした１ページ目ですが、これを５分刻みでコピーを取って、エクセル（表計算ソフト）に反映したものです。これはフランクフルトーミュンヘンの試合です。フランクフルトがバイエルンに勝った試合で、高原は点を入れませんでしたけど、最終的なデータがこれです。これらの全データを集めると、１チーム・１試合あたり 124 のチェックポイントが出てきます。これを私流に並び替えて、グラフにするとこうなります。

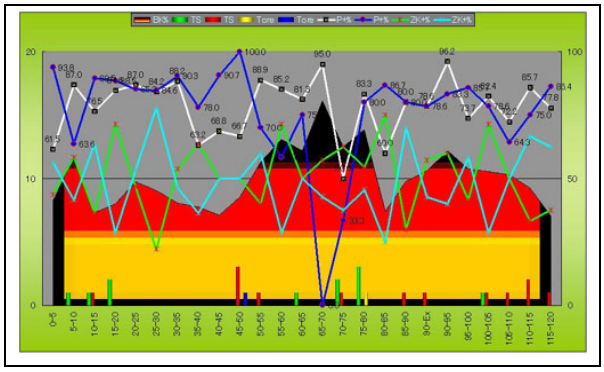
これは時間帯ですね。ボールコンタクト、ＢＫと書いてあるものですが５。日本でいったらポゼッションと言っていますけど、これは右側の軸ですね。真ん中が 50%。こういうカーブでバイエルンが押し込まれたということ。これはグラフの説明なのですが、この面になっているところが支配率。これがパスの精度。各時間帯によっていろいろ変化がある。この 50 のラインを挟んで対称になっているのが、１対１の勝率。

「支配率」「１対１の勝率」「パスの精度」――この３つのファクターを中心にワールドカップのデータを取ったんです。ご存じのように、トータル 64 試合。グループリーグ３試合目は同じ時間に始まったので、取れないデータがいくつかあったのですが、データを取れたのが 46 試合。１試合だけさぼりました。アルゼンチンーオランダ戦です。グループリーグをすでに２勝しているチーム同士の試合でしたから、やっても面白くないと思って、お酒を飲んでいました。

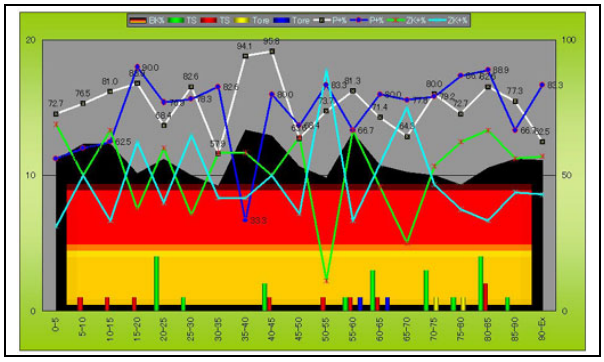
ワールドカップのグループリーグは、試合開始が３時、６時、９時の３パターンあって、それぞれ試合開始の１時間前に準備を始めなければならないので、試合は１つも見られませんでした。５分刻みに、３ページ分のデータをエクセルに落として、整理して、ここまでできたと思ったら次の試合が始まる。そういう作業を１日３試合、15 日間連続でやりました。ワールドカップ期間中は、この画面しか見ていないです。きょうは時間に制限があるので全部をお見せできないのですが、ここにベスト８に残ったチームのデータだけは持ってきました。



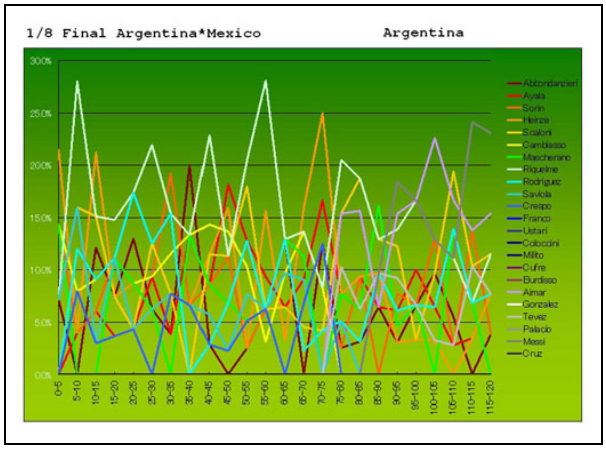
これはアルゼンチンーメキシコ戦。これがポゼッション、私は「試合のメリハリ」という言い方をしているんですが、この氷河みたいなこのラインを覚えておいてください。アルゼンチンはメキシコに延長戦の末２－１で勝ちました。



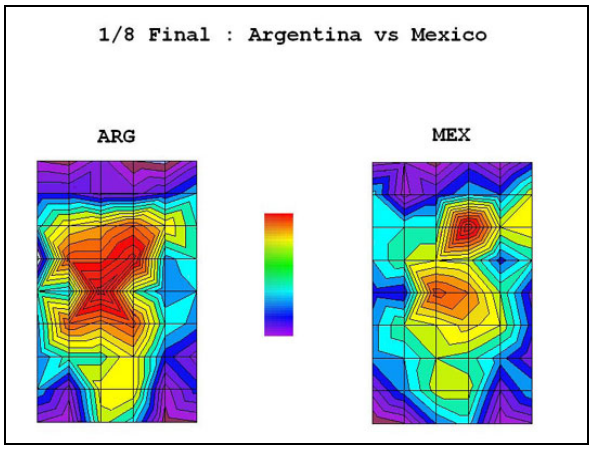
次に当たったのがドイツです。先ほど池田さんもおっしゃっていましたが、ここでドイツに勢いがつきました。ドイツにしては普段にない、ちょっと違うカーブなんですが、でも後半の始めからちょっと上げていくという、なかなかドイツらしいカーブです。

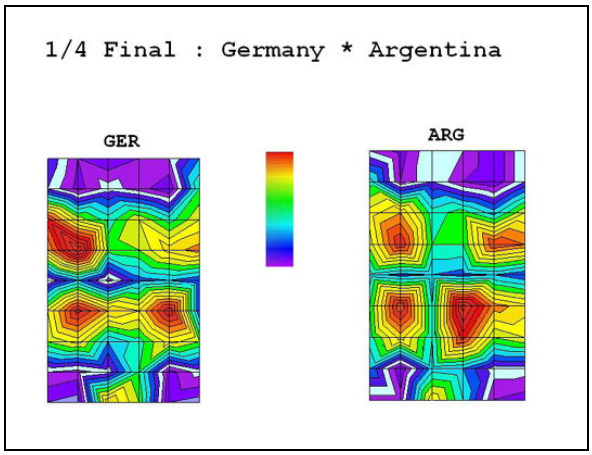


しかし準決勝のイタリア戦になると、よく覚えていてくださいね、この山の字。準決勝のドイツは、もう少しで勝てそうだとドイツ国民は思っていたんです。みんな泣きましたね、デルピエロにやられた２点目の時は特にそうでした。結局、ノコギリの刃というかこんな感じに平になってしまって、結局「試合のメリハリ」をつけられなかった。そういう攻め方をさせなかったイタリア。完璧にイタリアに牛耳られて、勝てるチャンスがなかったということです。



これはメキシコーアルゼンチン戦で、アルゼンチン選手が５分間でどれくらいボールに触ったかというグラフです。これはリケルメです。ここで、最初にアイマール、メッシが出てきてすぐ決勝点をロペスが決めました。これはアルゼンチンらしいゲームでした。しかし、次のドイツ戦はリケルメがいないんです。





これは「バードアイ」（鳥瞰）といいますか、天井から見てこのチームの誰がどこでボールを触っているのかということを示しています。私はこれを「ホットゾーン」と名付けたんですけど、ここに誰がいるか想像できますね、先ほどのグラフから。ここにテベスがいて、クレスポ、ロドリゲスにゴンザレス。ここにこういう傘をはった富士山のような山ができて、そして裾野が４つありますね。これがショートパスをつないでシュートチャンスを狙う、これがアルゼンチンの対メキシコの戦略ですね。

ドイツと対戦するまでの、アルゼンチンのシュートを１本にどれだけパスをつないだかという数字を見ると、46 本パスをつないで１本シュートを打つんです。対するドイツは、これまでに 20 本パスをつないで１本シュートを打つというデータが出ました。

■リケルメを殺すのに「刃物はいらなかった」

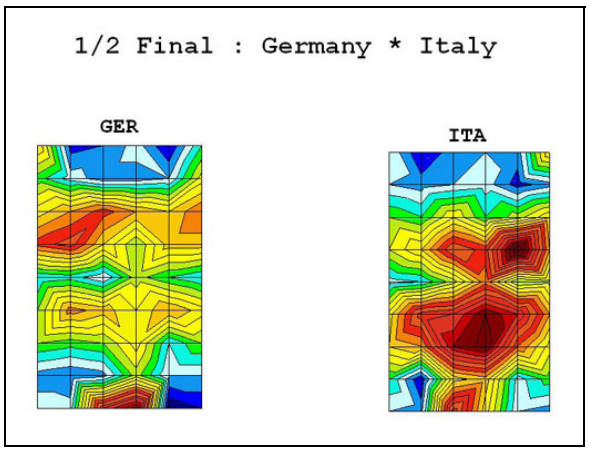
さて、そこでこのアルゼンチンに対して、クリンスマン監督のドイツはどう戦ったのでしょうか――。準々決勝・ドイツーアルゼンチン戦をこの「ホットゾーングラフ」で見ると、アルゼンチンはこうなってしまうんですね。先ほどの各選手の折れ線グラフで見た時にリケルメが消えていましたけども、本来あった中央の「山」が消え去り、４分割されてしまうんです。この試合の後、日本のメディアも書きましたが、ペケルマン監督の采配ミスだと。なぜあそこでリケルメを下げてしまったのかと。でも実際、彼の目にはドイツ戦でリケルメはまったく機能しないと映ったのだと思います。ただデータを見ると、リケルメがドイツの選手に１対１でぴったりつかれて何もさせてくれなかった、というわけではないのです。ボールのタッチ数も普段どおり。１対１で崩されたという形跡もなし。でも仕事はさせてくれなかった。そこで、後々もう一度詳しく調べてみたんです。このアルゼンチンの「山」を４分割するためにクリンスマンは何をしたのだろう。本当に磁石を置いたんじゃないかと思うくらいに見えるんですけど…。いみじくも先ほど池田さんが、ラーン、シュバインシュタイガー、ポドルスキー、メルテザッカーなどドイツの若手代表の名前を挙げましたけど、データを見ると、リケルメを殺すのに「刃物はいらなかった」のです。ドイツは、ここにシュバインシュタイガーがいて、ここにラーンがいて、ここにフリ

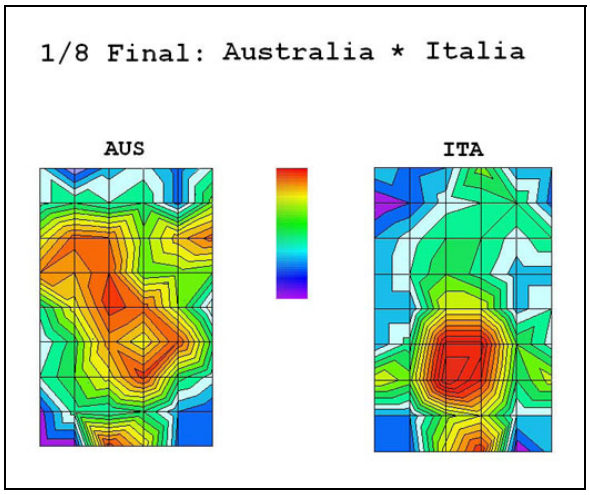
ードリッヒがいて、ここはシュナイダーだったんです。頻繁に上って下って上って下ってなんです。そうすることで、どうしてもパスのもらい手を外へ、外へと行ってしまって、そこにリケルメが寄る形になって、そこが詰まってしまったので、得意のショートパスではなくて、拠点から拠点につなぐという形になってしまったんです。

これは大会後に分析して出てきたデータなんですけど、ワールドカップを生で見てなくてよかったな、生で見ていたらこの絵は描けなかったな、と実感しています。

■「ドイツらしさ」を消すことに成功したイタリア

次にドイツが対戦するイタリアとはどうだったのでしょうか。ドイツはアルゼンチン戦と同じような形です。というのは、アルゼンチンに試合をさせなかったドイツでしたが、ドイツも自分たちのサッカーができなかった。イタリアは、ドイツをこういうようにすれば自分たちも勝てると思ったのです。先ほどノコギリの刃みたいな形になった図をお見せしましたが、それがリッピ監督の採用したひとつの方法です。いかにして勝つのかではなく、いかにしてドイツにドイツのサッカーをさせないかという方法。アルゼンチン戦でドイツが得た流れが、最終的には敵将・リッピにもヒントを与えてしまったという。アルゼンチンを破りながらイタリアに勝てなかったのは、いわば墓穴を掘ったと、取れなくもありません。





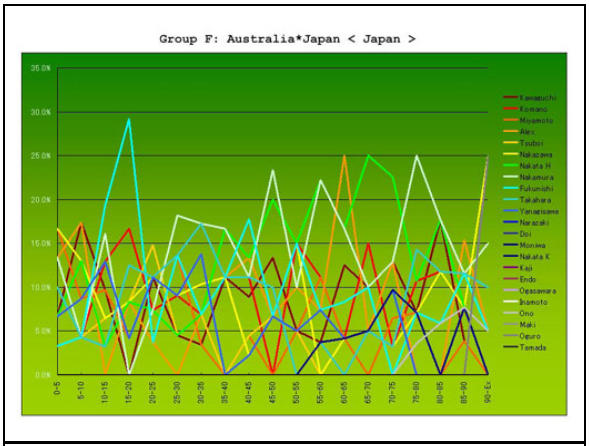
今回のワールドカップで、データとしてどの試合が一番面白かったかと聞かれれば、やはりアルゼンチンーメキシコ戦と、アルゼンチンードイツ戦です。

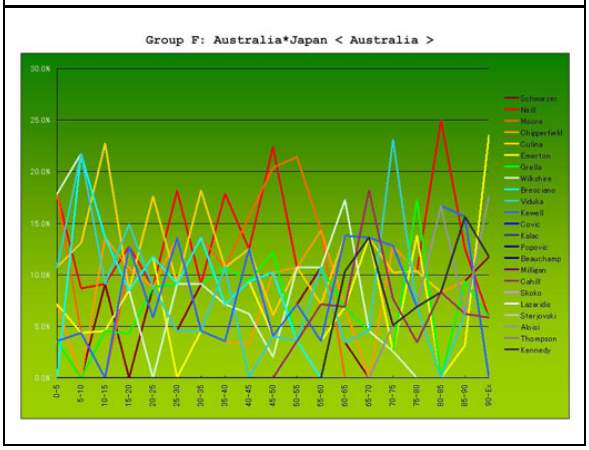
では、優勝したイタリアはどのようにして最終的に勝ったのか。では皆さんに質問します。皆さんご存じのカデナチオを絵に描いたらどうなりますか？　実は「最後の最後で勝った試合」、ＦＩＦＡのブラッター会長が、年明けに「あのＰＫはなかった」とオーストラリア人に謝った試合です。ここがＰＫです。オーストラリアが負けたんです。見て下さい、今回のワールドカップでイタリアと対戦したチームの中で、ここまでいったチームは他に一国もなかったです。

余談になるんですけど、ちょうど１年前ドイツの雑誌でオーストラリア代表監督だったフース・ヒディンクがインタビューを受けていました。オーストラリアは今大会でどこまでいけるかということをジャーナリストに聞かれて、彼は「ベスト８、ベスト４も、セミファイナル、ファイナルも我々の関心ではない。オーストラリアのサッカーをステップアップさせるために、やることはひとつ」。その後の言葉は想像つきますか？「ブラジルに勝つ、グループの第２戦で当たるブラジルに勝つと。勝てばお前らは英雄になれる」と、ずっと言い聞かせていたらしいです。ヒディンクは、ブラジルは大会を７試合戦うと計算してくるから、グループリーグは流すだろうと。クロアチアは初戦で、しかもベルリンというクロアチア人が多いところでブラジルと対戦するので、初戦でサプライズを起こすんじゃないか、と読んだようです。第２戦でブラジルと当たるオーストラリアがブラジルを負かせば、現チャンピオンが予選敗退になる可能性がある。そうなればお前たちはヒーローだと。準々決勝、準決勝、決勝に出るよりも、オーストラリアのサッカーには意味があると、そういう言い方を選手たちにしたようなんです。

■日本の敗戦には、ひとつの構図が浮かび上がる

いよいよ日本代表に話を移しましょう。これが初戦のオーストラリア戦です。１点、２点、３点。後でまた戻ってきますけど、これをちょっと頭の中に入れておいてください。

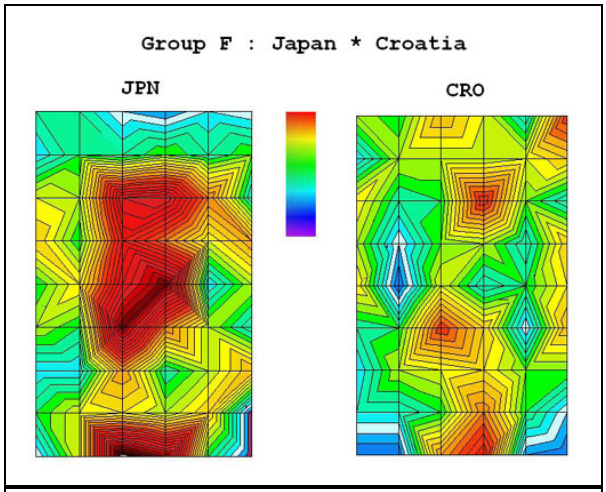


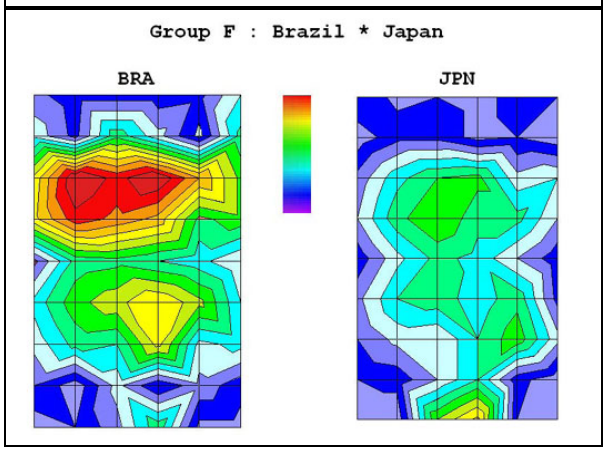


これはオーダーシート順に色をつけていますので、キーパーがここ。赤系から黄色までがディフェンダーだと考えてください。緑、水色がＭＦの、ブルーがフォワード。これが日本です。ここが中村と中田。アレックスもいます。

失点のところ、これを見てください。オーストラリアの支配率は下がっています。

しかし、１対１の勝率は上がっています。同時にパスの精度も上がってきています。先ほど言いましたけれど、３つの要素の順番が、ポゼッションをＡ、パスの精度をＢ、１対１の勝率をＣとすると、ＡＢＣ、ＢＣＡ、ＡＣＢ、どんな順番に重なっていくのか、プラスになるのか、マイナスになるのか。オーストラリアにとってポゼッションは下がり、１対１の勝率が上がり、パスの精度が上がる。その時にどうして、裏を返せば、支配率は上がるけれども１対１で負





け、相手に正確なパスを通されるときに日本は失点をする、という構図が見えてきます。

これはクロアチア戦です。これはブラジル戦。もう歯抜け状態ですね。後でちょっと戻ります。

これがオーストラリア戦でのホットゾーン。一番ボールに触っているように見えるのがＧＫ川口ですよね。あのパンチングに赤点がついているかもしれないですね。でも、押し込まれたという感じはするのですけれども、実のところ、ロングボールやクロスの数字を見ると、最後の 15 分は３本くらいしかないんですね。実際は少ないんです。

これがクロアチア戦です。ボールを持つだけ持っているんです。

これがブラジル戦です。１点を先制したときは、２対０で勝てると私の周りの人はみんな期待しましたけど、終わってみればロナウジーニョ、カカですよ。誰も赤系が出ないですからね。

■決して「燃え尽きた」のではない

さて、ここがきょうの本番です。これは大会前、前技術委員長、今は専務ですけど、燃え尽きたと言っていた試合です。２－０から２－２になった試合です。そう、大会前のドイツ－日本戦です。

高原の１点、高原の２点、よく見て下さい。支配率が下がる、１対１が上がる、パスの精度が上がる、失点している。日本の点の取られ方っていうのが、もうこの時に明らかになっているんですよ。２－０で勝っていながら勝ちに持っていけなかったと言われていますけれど、重要なのは負けるところにパターンがあるということです。それも 70 分、75 分から 90 分です。今回は、パスの精度と、支配率と、１対１を拾ってグラフにしました。ひょっとしたら、それ以外に見落としているところがあるのかもしれませんが、今のところはこの３つの見方から分析します。

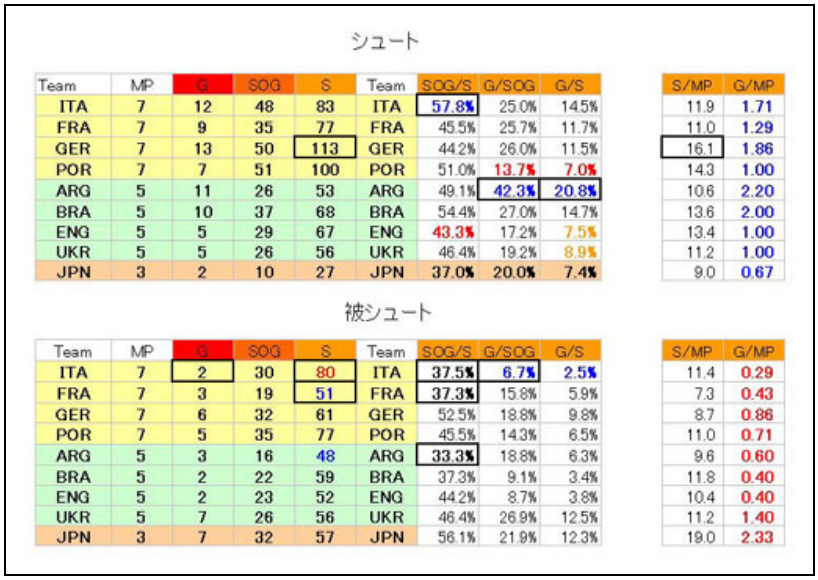
実のところ、これは「燃え尽きた」などというものではなく、日本がやってはいけないことがはっきりした試合なんです。それを舞い上がってしまった。ひょっとしたらドイツに勝てるんではないかと。いろいろと裏話をすればきりがないんですが、クリンスマン監督はこの時点で日本とやりたくなかった。彼らの合宿のスケジュールからすると、ブンデスリーガが終わって、サルジニア島で１回クールダウンをして、ジュネーブで激しい合宿をして、それが終った次の日なんですね、この試合は。筋肉に乳酸が残っている段階です。できればしっこい日本とやりたくないと、クリンスマンはドイツ協会に掛け合うのですが、日本協会に拒否されます。それで強行したので、彼らは前半でおしまいだと思っていたんですよね。選手には 45 分でＯＫを出したんです。しかしドイツはちょっと気を抜いたばかりに点を取られ、それでなくても１カ月前にフローレンスでイタリアに０－４で負けていたので、これは大変なことになると気合いを入れて追い付いたんです。

■ドイツ戦を教訓としなかった日本

日本にとってはひとつのお手本、教科書にすべき試合でした。「支配率が下がる、１対１が上がる、パスの精度が上がる」というドイツ戦の分析がしっかりできて、失点の内容が分かっていれば、オーストラリア戦であいうことは起きなかった。オーストラリア戦では、あの状況下でなぜ小野伸二を入れたのかなど、いろいろな批判があります。ワールドカップ後、ジーコ監督が「日本選手と外国の選手の間には体格差があった」とコメントしたことに対し、そんなこと 30 年前、40 年前から言われているよ、と皆さん思ったかもしれません。でもちょっとだけジーコの肩をもって通訳するとしたら、失点するときはポゼッションにこだわるのではなくて、１対１にこだわって、ということだったと思います。１対１で潰されて、彼らはポゼッションを捨てても、１対１で取ったボールを正確につなぐ。これはポンポンとつながったということではありませんからね、パーセンテージですから。１個取って、１個やったら 100%になるんですから。ご覧になれば分かるのですが、全部下がっていますよね。ボールコンタクトの数は少なくても、正確につなげてシュートに結びつける。そんな形で点を取る。このパターン化をドイツとの親善試合で気がついていれば。こういう時間帯で後ろで回していると、相手が寄ってくる。こういうことをやっていったらいけない。これが今回のワールドカップの日本代表についてのことです。日本は失点の仕方がよく似ていた。失点がパターン化されているのが、オーストラリアの前の試合の前のドイツで見えていたと。それを修正できなかったということが言えるんじゃないかと思います。

■日本はシュートを打たれすぎる

最後２つだけ。データ、データでみなさん嫌うんですけれどね。2006 年大会の平均得点が「２．３」で、歴代で３番目に低い得点数だと言われていましたけれど、私はこれとは逆に、どれだけシュートを打たれたかというデータを集めてみたんです。これが、打たれ



シュート

Team	MP	G	SOG	S	Team	SOG/S	G/SOG	G/S	S/MP	G/MP
ITA	7	12	48	83	ITA	57.8%	25.0%	14.5%	11.9	1.71
FRA	7	9	35	77	FRA	45.5%	25.7%	11.7%	11.0	1.29
GER	7	13	50	113	GER	44.2%	26.0%	11.5%	16.1	1.86
POR	7	7	51	100	POR	51.0%	13.7%	7.0%	14.3	1.00
ARG	5	11	26	53	ARG	49.1%	42.3%	20.8%	10.6	2.20
BRA	5	10	37	68	BRA	54.4%	27.0%	14.7%	13.6	2.00
ENG	5	5	29	67	ENG	43.3%	17.2%	7.5%	13.4	1.00
UKR	5	5	26	56	UKR	46.4%	19.2%	8.9%	11.2	1.00
JPN	3	2	10	27	JPN	37.0%	20.0%	7.4%	9.0	0.67

被シュート

Team	MP	G	SOG	S	Team	SOG/S	G/SOG	G/S	S/MP	G/MP
ITA	7	2	30	80	ITA	37.5%	6.7%	2.5%	11.4	0.29
FRA	7	3	19	51	FRA	37.3%	15.8%	5.9%	7.3	0.43
GER	7	6	32	61	GER	52.5%	18.8%	9.8%	8.7	0.86
POR	7	5	35	77	POR	45.5%	14.3%	6.5%	11.0	0.71
ARG	5	3	16	48	ARG	33.3%	18.8%	6.3%	9.6	0.60
BRA	5	2	22	59	BRA	37.3%	9.1%	3.4%	11.8	0.40
ENG	5	2	23	52	ENG	44.2%	8.7%	3.8%	10.4	0.40
UKR	5	7	26	56	UKR	46.4%	26.9%	12.5%	11.2	1.40
JPN	3	7	32	57	JPN	56.1%	21.9%	12.3%	19.0	2.33

たシュートの数です。イタリアが 80 本、フランスは 50 本、その中で枠の中に入れられたのは、それぞれ 30 と 19 です。イタリアの失点は、オウンゴールとＰＫだけです。このデータで見てみると、アルゼンチンを除いて、イタリアとフランスは一番シュートを打たれても枠の中に入れられることが少なかったチームです。特にイタリアは枠内に入っても、もちろんＰＫとオウンゴールですので実質は０なんです。フランスは枠内から得点が 15%、シュートからゴールは。いろいろ数字がありますけれども、これは彼らが決勝に進出して当然という数字です。ただ、守備重視というわけではなくて、見てもらいたい数字はここ。イタリアは、打たれ強いんです。枠の中に打たせない。フランスは打たせない。フランスは７試合で 50 本、日本は３試合で 57 本。確かに日本は得点力が不足していると言われますけれど、実のところは打たれすぎなんです。これが私の数字から言えることです。

今日１点入れてくれるだろうと思って。これは先ほどの日本対ドイツの親善試合の高原の１点です。よく見て下さい。（映像）

おかしな動きをしていますけど、これが今ドイツのメディアの最新のやつです。実況中継でリプレー、ないしはカメラのないところを特別なカメラアングルで再生しようと。欲張って先ほどの個人のデータ、チームのデータ、ホットゾーンのグラフ、このアニメを合わせて、全部試合中にリアルタイムにデータを取って絵にして、マンガにして、グラフにしちゃおうというものなんですね。ドイツって進んでいるんです。

これが先週のブンデスリーガ、フランクフルトーバイエルンです。（映像）
だいぶ時間を超過しました。ここで終わりということで。

中塚：おそらく一晩中話しても終わらないと思うんですけど、すみませんが時間もありますので。ただひとつだけ質問です。最後に見せていただいたＣＧの映像は、ドイツのテレビで見られるのですか。

庄司：ひょっとしたら日本で見られるかもしれません。

中塚：もう一般の人も見られるようになっているのですか。

庄司：なっています。チャンピオンズリーグで使っていました。ハンブルグーアーセナル戦で、開始５分くらいでハンブルグのキーパーが赤をもらって退場になったやつを、正面のアングルから取って、アニメにしてグルッとキーパーの周りをしてみたらほんとうに触っているのかと。

中塚：じゃあそれはもうリアルタイムで…。

庄司：45 分くらいかかります。それをリアルタイムにしようということで。ただ、向こうは肖像権なんかもあるので、生よりもアニメ、アニメでまたアングルを変えて。だからちょうどキーパーが触っているのか、触っていないのかという、なんせ向こうはメディアのサービスが、みんなが納得するような、感覚だけのコメントはなしに、至れり尽くせりにいい中継をしようということをやっていますね。

中塚：どうもありがとうございました。それでもうすでに、第１部の時間も終わり、時間も押して、休憩時間も終わり、もうすでに第２部の時間に入っているのですが、演者はもう１人いらっしゃいます。

チケットから見えたドイツ２００６

サッカー観戦文化 10 年の変遷

株式会社セリエ 代表取締役　徳田 仁

中塚：育成の話、ゲーム分析の話と、コーチや指導者のための話が続いているかと思うんですが、われわれの公開シンポジウムでは指導者の方にサッカーを取り巻くグローバルな環境にも目を向けていただきたいということで、株式会社セリエの徳田さんにお話をお願いしました。98 年ワールドカップ・フランス大会の前後から観戦ツアーを手がけられて、昨年のドイツ大会でも多くの私を含めてたくさんの日本人をドイツに送り込まれた。今日はその豊富なご経験から「観戦文化」をキーワードにお話をしていただきたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

■国交省がチケット確認に乗り出した

徳田：こんにちは、株式会社セリエの徳田と申します。もうすでに、ここまでのお二人のお話でお腹がいっぱいになっている方も多いかとは思いますが…今しばらくおつきあい願います。さて、私の会社は観戦ツアーのほかにサッカーやフットサルの大会主催などを行っている会社なのですが、今日は「見るサッカー文化」をテーマにお話しさせていただきたいと思います。

まず、今回のシンポジウムの大テーマである「昨年のワールドカップ」をどのように迎えたかというところからはじめたいと思います。観戦ツアーの準備も５月末のドイツｖｓ日本戦あたりが一番のピークでした。そしてその頃のドイツはまたものすごく寒かったんです。そのせいもあってなのか準備が進んで、いざ日本からのお客さんを迎える段になってもドイツ国内のワールドカップへの盛り上がりはあまり感じられませんでした。

そんな中、６月に入り開幕まであと数日というところで、日本ではM社のワールドカップ観戦ツアー中止騒動が勃発したため、弊社もマスコミの取材攻勢をうけるはめになりました。日本サイドでは時期的にもツアーの最終確認（参加者への出発案内書の発送作業）に忙しく、とても取材に応えていられる状態ではないので、全部ドイツの私のところへかけさせるよう指示出ししたところ、新聞社やＴＶ・ラジオの報道部から夜中の３時（日本は朝 10 時）に「おたくは大丈夫なんですか」という電話が何本も来ました。勘弁してくれと思いましたが、下手な対応もできないので「うちはすでに７割以上にチケットは届いてい

て銀行の貸金庫に保管してあります・・・」などと対応する日々でした。そうしたら今度は国土交通省が乗り出してきて、「オタクはあと何枚足りないのか？」、「どの試合を募集しているのか?　その試合のチケットは揃えられるのか？見通は？」などという調査の電話やメールも来るようになりました。問題になったM社が国交省の管轄だったため、大騒ぎになってしまいましたが、民間のことは民間にまかせておけばいいのにと思いましたね。国交省が足りないチケットを用意してくれるなら別ですが・・・。余分な仕事が増えてしまい、数日間は通常の業務がストップしてしまうことになってしまいました。

ワールドカップ直前はこんな感じでしたが、大会が始まってしまえば一気に盛り上がって、気候も急に暖かく（暑く）になりました。

弊社のツアーで日本から来られるお客様は合計 1500 人くらいでした。私も主催者の特権？でお客さんに帯同してグループリーグの日本戦３試合は見るつもりでいましたが、皆さんご存知のように初戦と２試合目は昼間の試合でとても暑かったのです。お客さんを連れて会場に到着、一緒にスタジアムに入る着席すると、そこには屋根があり気持ちよい風が吹いてきて、（開幕前の騒動の疲れもあり）私は思わず眠りこけてしまいました。お客さんに寝ちゃダメですよ！と何度も起こされましたが、夢の舞台を夢の中ですごした２試合でした。３試合目は都合で帯同を断念したので見ていませんが、そんなふうにしてグループリーグが終わりました。悲しいことに日本の試合の前後以外はグループリーグの記憶ほとんどありませんでした。ベスト 16 以降になってようやく記憶にインプットできるようになりました。先ほど庄司さんのお話にもあったドイツーアルゼンチン戦あたりから、私のドイツ大会は始まったというような気がしています。

■あのときの日韓戦は、会社の電話が朝から晩まで鳴り止まなかった

さて本日の私のテーマですが、2006 年ドイツ大会に至るまでの、日本のサッカーの「民度」についてお話したいと思います。民度を辞書で引くと「生活水準」というような意味が出てきますが、サッカーにおいての民度は、見る人のレベルというか、生活の中にサッカーがどれくらい浸透しているか、ということだと思います。サッカーの民度が上がることが、日本サッカーの発展に大きくかかわることは明らかですが、日本におけるサッカービジネスのマーケットの拡大とも表裏一体で、両者の関係は切っても切り離せません。

ドイツ大会の前に、Ｊリーグが始まってからの 15 年がどうだったかいうことをまず触れておきたいと思います。お手元の資料１「日本サッカーファン、サッカー文化の歩み」という年表と資料２「レギュレーションの変更・・・実例」をご参照ください。

Ｊリーグが華々しく始まったのは 93 年 5 月 15 日のことですが、その頃のサッカー解説者（ブラジル系の人が多かった）が良くコメントしていたのは、「日本では、野球は子どもから大人までみんなルールをよく知っているし、このプレーが良いとか悪いとか、あるい

は下手だとか、審判のジャッジがダメだとか、そんな「街の評論家」が日本中にいっぱいいるが、サッカーではそうじゃない。マスコミ、テレビ局の人たちの中にもよく分かっていない人が多いんだ。」ということでした。確かにその時点ではそうだったんです。それが15年経ってどのように変わったのでしょうか。

Ｊリーグがスタートした年に、いきなりワールドカップ・アメリカ予選の「ドーハの悲劇」が起きました。93年10月28日のことです。皆さん覚えていらっしゃると思いますけど、翌日、日本中がお通夜のような状態になりました。Ｊリーグが華々しく始まって、お祭り気分の日本のサッカーファンはいきなり地獄を見ました。「サッカーは何が起こるか分からない」「サッカーは、面白く怖いスポーツなのだ」ということを日本人に強烈に思い知らせた最初の出来事だったと思います。

予選敗退のため、翌94年のワールドカップ･アメリカ大会は第三者として体験しました。ロベルト・バッジオ（イタリア）というスーパースターが現れた大会でした。そして、その翌々年の96年７月、日本中が勝利を予想していなかったアトランタオリンピックのブラジル戦で「マイアミの奇跡」が起きました。これはＡ代表の試合ではありませんが、まさかブラジルに勝つとは・・、誰も予想していないことが起きた。このときは、ドーハの悲劇とは逆の意味で「サッカーは何が起こるか分からない」ことをサッカーファンに実感としてインプットした試合だったと思います。惜しくもこのときはグループリーグ３位で敗退したんですけど、よくやったという印象で終わった大会でした。

さて、その翌年97年11月が「ジョホールバルの歓喜」です。最終予選のグループリーグ8試合を経てそこに辿り着くまでの道程が劇的だったため誰かが書いたシナリオじゃないかと思うぐらい、日本中のサッカーファンがこの予選にのめり込んでいました。

しかし、これだけ私たちの記憶に焼きついている、フランスワールドカップ・アジア最終予選も最初はチケットが手に入らないような状態ではなかったのです。弊社はアジア一次予選から観戦ツアーを企画していましたが、一次予選から最終予選の第１戦：ホームのウズベキスタン戦（9月7日）まではさほど急に盛り上がる気配は無く、まして予約が殺到するような勢いはありませんでした。突如、第3戦の韓国戦（10月26日）のツアー受付開始から火が付いたのです。ドーハからずっと眠り続けていたサポーターが一気に目覚めたという感じでした。97年当時は、今のようにインターネットで予約を受け付けることはできませんでしたから、電話による受付が主流だったため、営業時間の朝10時に鳴り始めた電話が、夜11時過ぎまで鳴り続けました。そしてこれ以降、ホームの試合はＵＡＥ戦、カザフスタン戦と同様の状態が続きました。

最期のジョホールバル第三代表決定戦観戦ツアーにいたっては海外旅行としては前代未聞の受付状態でした。第三代表決定戦進出が決まったのが11月8日（土）のカザフスタン戦で、明けた月曜日からジョホールバルに出発する翌土曜日の11月15日までは５日間しかなく、この期間中はやはり電話が鳴り止むことはなく、なんとかして行きたいというサ

ポーターの思いがひしひしと伝わってきました。ジョホールバルに辿り着くまで、すでにサポーター全員が疲れ果て、かつお金を使い果たしている状態でしたが、結果的に勝つことができ、フランス大会出場というサポーターの願いがかなえられた喜びを仕事を通じで実感したときでした。もし、大陸間プレーオフまでもつれていたなら破産するサポーターが続出していたことでしょう。

翌 98 年、本番のフランス大会はグループリーグ 3 連敗。しかしこの敗退の痛手はありませんでしたが、この大会で皆さんの記憶に残っているのは、チケット問題だったと思います。このお話は後ほどいたしますが、翌 99 年、ワールドユース・ナイジェリア大会で準優勝。2000 年、シドニーオリンピックでベスト８。同じ年、アジアカップ・レバノン大会で優勝しました。

このように、特に 96 年以降日本サッカーは、ずっと当事者としてワールドカップ、ワールドユース、オリンピック、アジアカップを体験してきたという大きな変化と流れがありました。

■日本サッカーのレギュレーションが「進化」してきた

こうして、大イベントを当事者として体験する中、サッカーの民度が上がって行く過程で、日本のサッカーの進む道がどのくらいサッカーのグローバルスタンダード、要するにヨーロッパのサッカーに近づいていったのかということに注目したいと思います。

例として、Ｊリーグのレギュレーション変更を見ていきたいと思います。Ｊリーグがスタートしたときは、勝ち点制ではなかったのをみなさん、憶えていらっしゃいますか？　Ｊリーグの初期は野球にならって必ず決着をつける方針で行われ、90 分で決着がつかないときは、サドンデス方式の延長戦（これは後に「Ｖゴール」と呼び名が変わる）で行われ、それでも決着がつかない場合はＰＫ戦まで行って勝負をつけていました。Ｊリーグの最初の 3 年間は勝ち数で順位を決めていたのです。

その後、95 年にやっと勝ち点制が導入されました。このときは、90 分以内に勝つと勝ち点３、延長戦で勝つと勝ち点２、ＰＫ戦で勝つと勝ち点１という日本ローカルの変則的な勝ち点制だったのです。それがしばらく続いて、延長戦の廃止・引き分けの導入となったのは、つい最近の 2003 年なのです。2003 年、要するにＪリーグがスタートしてから 11 年目にようやく引き分けの概念が日本人の中で市民権を得たのです。そして、昨年の 2006 年からはカップ戦におけるアウェーゴールというグローバルスタンダードに近いレギュレーションが導入されました。これはヨーロッパのサッカーを見ている方にはもう当たり前のことですけれども、２試合の合計（アグリゲート）という考え方とホームアンドアウェーの考え方を併せて、両チームが勝敗も得点も同じ場合、アウェー戦のゴールの多い方を勝ちとするレギュレーションです。

先日、なでしこジャパン（女子日本代表）がワールドカップ予選プレーオフでメキシコに勝って本大会出場を決めました。内容は、ホームで２－０、アウェーで１－２でしたがその試合を日本のマスコミが、「２試合目は惜しくも負けましたけど、合計で勝ちました」というような伝え方をしていました。しかし、もしヨーロッパのサッカー好きがその試合を見ていたら、日本がホームで２－０で勝っていたなら、アウェーで１点先制した時点で相手は４点取らなければ勝てない。それはかなり難しいことだからメキシコが勝つのは無理だ、という見方をすると思います。あくまで２試合で１試合。このあたりの差を、今回のマスコミ報道ですごく感じました。ヨーロッパのメディアは絶対に１試合ごとにばらしては見ませんし、そんな風な報道もしません。これが「民度」ということだと思います。アウェーゴールについてはまだまだこれから、ということでしょう。

レギュレーションについて言えば、2006 年ワールドカップから大きな変更があったことは皆さんご存じでしょうか？　資料２の表１－１を見ていただきたいのですが、これは去年のビーチサッカーのワールドカップの時の星取り表です。ランクの部分は１位だけ記入してあり２、３、４位は入れていません。これ、どういう順位になるかお分かりになりますか？　これまでのレギュレーションでいくとＡ－４が２位で、Ａ－３が３位、Ａ－２が４位になると思いますが、レギュレーション変更によって、Ａ－２がグループリーグを突破しています。Ａ－２というのは実は日本なのですが、なぜ突破できたか、その理由を分かりやすく説明するために表１－２を見てください。レギュレーション変更の大きなポイントは、グループ内の得失点差・得点数よりも、当該チームの対戦成績を優先する点にあります。表１－２は表１－１の勝点が同じＡ２～Ａ４の３チームだけを抜きだした表になっています。こうすれば当該チーム同士のみ比較することができるので順位がどうなるか一目でわかると思います。

余談になりますが、表２はドーハのときの星取り表で、日本は３位のＣ－３なのですが、今度の新しいレギュレーションを適用すれば、日本は順位争いの当該国である韓国に勝っていましたから、２位でアメリカ大会に行っていたことになります。アトランタの星取り表を見ても、４位のハンガリーを除いて計算しても日本の３位は変わらないのですが、１位と２位の順位は逆転します。ですからレギュレーションが新しくなれば、当然戦い方も変わってきます。このあたりは、見る側としても今後いろいろな大会で意識しなければならないことだと思います。

また、Ｊリーグができるまでは、日本で外国語というと英語だったのですが、Ｊリーグにブラジル人など、いろんな国の人（アメリカ以外の人）が来ていろんな国の言葉を聞けるようになりました。これもＪリーグがもたらした新しい流れが、日本の国民に与えた影響だと思います。この 15 年間の大きな変化ですね。

■チケット料金が高騰する本当の理由とは

ここからの話は「チケットについて」です。私はビジネス面からサッカーのチケットを取り扱っていますが、流通を見る限り、チケットとは「期限つきの株」のようなものだと意識しています。世界の市場でも高いチケットを買う国民は決まっています。日本人も 98 年以降、高いチケットを買う国民だと世界中に知れ渡っていますけども、チケットにお金を使う国はどこかというと、イングランド、オランダ、アイルランドとスコットランドなどＵＫ内の国、そしてその次が日本じゃないかと言われています。イタリアやスペイン、フランスなどのラテン系は、基本的に高いお金は出しません。ドイツ人も基本的にケチなので高いチケットは買わないと思われています。高いチケットを買う国、言い方を変えると高くてもチケットを買う国の人が、多くワールドカップの応援に行く。だから、どのワールドカップでもイギリス人やオランダ人が目に付くのは、そういう理由からではないかなと思います。

では、どれくらい高いのかというと、例えば、中村俊輔のセルティックがヨーロッパチャンピオンズリーグで、優勝して以来 40 年振りにベスト 16 に上がったということで大騒ぎになった２月の試合のチケットはいくらだったと思いますか？　私もそのとき現地にいたのですが試合の２日前にタクシーのドライバーに聞いたら、500 ポンド（日本円で 12～13 万円くらい）だと言ってました。だから俺には買えないんだ。お前は行くのか？と逆につっこまれるような始末でしたが、買う人がいるから値段は上がっていくのです。買わなければ下がるのですが、見たい人でお金のある人は買ってしまうのです。

イギリスのチケットはもともと高くて、たとえばプレミアシップのカテゴリー１にあたるチケットは 48 ポンドくらい。ということは、1 万 2、3 千円するんです、自国の国内リーグの試合のチケットが、ですよ。ゴール裏でも 35～36 ポンドです。普段、このような環境で試合観戦しているファンたちがワールドカップやチャンピオンズリーグのチケットを買い求めるのですから当然値段も上がる。そういう土壌がもともとあるのです。

プレミアシップ 20 チーム（06/07 シーズン）の中には、ロンドンのクラブがレディングやワトフォードなんかも含めると８チームもあり、しょっちゅうロンドン・ダービーをやっています。その中でも地域性の強い、アーセナルやウエストハム、チェルシーなどの試合のチケットとなると、正規のルートで買えれば 50 ポンドそこそこですが、どうしても見たい人がチケットエージェントやダフ屋から買おうとすると、200 ポンド～500 ポンドという高いお金を払うことになります。イギリス人にとってどこのクラブを応援するかは代々伝わる家紋のようなもの。リーグ戦の試合に 300 ポンド、日本円で 7～8 万も払うような、もともとそういう文化の中にいる人たち相手に日本人はワールドカップやヨーロッパ選手権のチケット争奪戦を繰り広げているのです！

■お客さんの涙にそれまでの苦労は吹っ飛んだのだが・・・。

話を 98 年フランスワールドカップに戻すとします。この大会はどうだったかというと、初のワールドカップ出場で盛り上がっていた反面、日本のツアー会社は、自国が出場するワールドカップの経験がなく、今考えるとチケットという生き物を甘く見ていました。

去年のドイツ大会の 1 試合観戦ツアーの平均参加費は 40～50 万円だったと思いますが、フランス大会の時は 20～30 万円台でしたので、ドイツ大会のツアーは高いなと思った方も多いと思います。確かにドイツはホテルも高く、日本からの航空運賃も高いのは間違いありませんでしたが、一番の理由はヨーロッパの真ん中で行われる大会のためチケット価格が高騰したことが原因です。ヨーロッパの真ん中・・・要するに巨大なサッカーマーケットである欧州のどこからでも陸路で見に行くことができる・・・という地理的原因がチケット代を押し上げたのです。98 年もフランスという欧州の真ん中行われた大会ですから、本来同じようなツアー価格になっていてもおかしくなかったのですが、そこまで見通せなかった。経験値の低さがチケット騒動をもたらしたといっても過言ではないでしょう。

98 年の大会中、私はツアーに参加してくれたお客さんのために必死になってチケットを買い集めていました。ルートを選ばずとにかく買い集めたという表現が正しいかも知れません。あと数時間後には日本からのお客さんが到着するのに、まだ 6 枚足りない…。そんな極限状態の中、必死になってかき集めていました。そして、運よく何とか間に合わせて、空港に到着したお客さんに「みなさん分はご用意できています。」と報告すると、お客さんが皆泣くんです。もうボロボロと・・・。それを見て内心はとてもとても嬉しく苦労が吹っ飛ぶ思いでしたが、チケット付のツアーですからチケットがあるのは当たり前。そんな当たり前のことができず、お客さんを心配させてしまったことを痛烈に感じていました。私にとっては、こんなにがい思いを残した 98 年でありました。

■2002 年大会、チケット手配の“裏事情”

2006 年ドイツ大会で、98 年の日本と同じくらいチケット確保に困っていた国がひとつだけあります。みなさん想像がつかないと思いますけど、実はメキシコなんです。今回のメキシコのチケット代は 98 年の日本ーアルゼンチン戦を超え、1 枚 1000～1500 ユーロに高騰していました。なぜかというと、今回ドイツに観戦に行った日本人は 1 万 5 千人くらいと言われています。（フランス大会では２万人以上）　しかし、今回のメキシコ人はなんと 4 万 5 千人も来ていたらしいのです。しかも、その半分以上がチケットを持っていない、そんなサポーター達がドイツの国中でチケットを探すものですから、どんどんどんどん値上がりして 1000 ユーロ以上という相場になってしまっていたのでした。大会が始まる前からチケット代が高騰していたオランダーアルゼンチン、イングランドースウェーデン、日本ーブラジルなどは試合が近づくと落着いてきていましたが、メキシコ戦は尻上がりに高騰。日本がメキシコと同じ組じゃなくて良かったと、大会後はつくづく思いました。

ヨーロッパの真ん中でやるワールドカップ、来年のユーロ 2008、スイス・オーストリア大会も同じことが予想されますが、真ん中という立地条件での開催だと、便利がいいのでたくさんの人が来る。すなわちチケット奪取戦がますます激化します。じゃあ１つ前の自国開催、2002 年の日韓大会はどうだったのでしょう。

実はそれほどの戦いはなかったんです。チケットは特に問題もなく確保することができました。

これはいったいどういうことだったのでしょう。二つの理由が考えられます。ひとつは、極東開催だったため観戦のために日本を訪れることができる外国人がヨーロッパ開催に比べ少なかったことが上げられます。実際、開催中日本に多く訪れていたのは前述のイングランドとアイルランドくらいでしたし、日本においては日本人同士が争奪戦を繰り広げただけだったのです。もうひとつの理由としては、ＦＩＦＡがチケット付き観戦ツアーはダメというおふれをだしていたことと、チケットを記名式にするとう転売抑制情報に日本人が過敏に反応してしまったことです。これについてですが、ＦＩＦＡは日韓大会において、フランス大会の反省から「オフィシャルの旅行社を設定しない」＝「すなわち旅行会社用のチケット枠は作らない」ということだったのですが、いつの間にかチケット付き観戦ツアーはダメということになっていたのでした。そのため、記名式という情報とあいまって、チケットを供給したい人がいて、チケットを買いたい人がいても、その間をつなぐしくみがなくなってしまい、行き場のないチケットが大量にできてしまったので、結果的にチケット確保が容易だったと考えられます。

日韓大会の裏話をひとつご紹介します。ＦＩＦＡも日本協会も認めないはずの話です。日本のワールドカップの開幕当初、１ブロックがまるまる空いている試合があって問題になりましたね。

なぜそんなことがおきたのでしょう。某チケット・サプライヤーから聞いた話ですが、ある国のサッカー協会は予算が少ないので活動資金をなんとかして稼がなければなりません。そんな国にとって、ワールドカップは絶好の資金調達方法だというのです。ＦＩＦＡに加盟している国なら割り当てられるチケットは１試合あたり収容人数の 8%くらいです。5 万人規模のスタジアムですと 8%ですから、約 4 千枚くらいですよね。その国は貧しいので自国ではチケットが売れない（日本まで観戦に来ることができない）ので、ブローカーを通じて売ろうとします。その結果、たとえば半分の約 2 千枚が定価の５倍で売れたとします。4 千枚のうち 2 千枚を高値で売っているわけですから、のこり半分を売らなくても十分稼いでいるわけです。大量に席が空いたのはこんなことが原因だったのではないかと考えられます。

余談ですが残り半分も売れればさらにボロ儲けです。ワールドカップに出ていない国ならば割り当てられるチケットの割合はもっと低くなりますが、それでも十分稼げるはずです。そこで稼ぎ出したお金がどこに行くかは知りません。その国のサッカーのために使わ

れるかもしれませんし、特定の人の懐に入るのかもしれません。ワールドカップの裏ではそんなチケットも動いています。

■「２世代サポーター」の出現

チケットをテーマにするとどうしても裏の話になってしまいますので、次は表のお話として観戦ツアーについて話したいと思います。

日本で「欧州サッカー観戦ツアー」が本格的に始まったのは、98 年フランス大会で中田英寿が注目され、直後にセリエＡ・ペルージャに移籍してからだと私は考えています。もちろんワールドカップ本大会やワールドカップ予選、五輪に関しては既に観戦ツアーは存在していましたが、20 万円程度のツアー代金を払って、セリエＡのヒデの試合を見に行こうという、欧州リーグのレギュラーシーズンの観戦ツアーのスタートは、この 98 年からだと思っています。

もちろん、それまではセリエＡそのものが日本ではあまり知られていませんでしたから、前段階として 95 年にカズがセリエＡ・ジェノアに移籍し、ＴＶ（このときはWOWOW）を通じて欧州サッカーが身近になった歴史も忘れてはなりません。

2002 年日韓大会後のベッカム人気もすごく、欧州サッカー観戦ブームに一段と拍車がかかりましたが、自国開催のワールドカップの後だけに、急にファンが増えたため、ベッカムがどこのチームに所属しているのかも知らない人が、観戦ツアーに参加しようと問い合わせしてくる状態でした。当時、ベッカムはマンチェスター・ユナイテッドでしたが、それがどこの国のどこの街にあるのかとか、プレミアシップの事情をまったく知らない人から、どんどん電話がかかってきて…。正直、大変でした。

しかし、ワールドカップを自国で開催したことが与えた影響は大きく、サッカーファンの底辺が一気に広がって、親子サポーターが多くツアーに参加するようになりました。特に日本代表の観戦ツアーには親子サポーター、すなわち２世代サポーターが多いんです。そのパターンも母－娘、母－息子、父－娘、父－息子の中で一番多いのが母－娘パターンです。父－娘、父－息子はほとんどいません。もう少し詳しく言うと、母－娘の２世代サポの中には「おばあちゃんとお母さん」というパターンも多いのです。それくらい女性ファンの底辺が広がった時期でした。

2002 年からファンになったサポーターは当然、ドーハの悲劇を知らないし、ジョホールバルも知らない人がいます。ツアー中に参加者同士で食事をするような機会に、ジョホールバルやドーハの話を世代を超えて自然に語り継いでもらう、この２世代サポーターがサッカー観戦ツアーの盛り上げに一役買っていただいています。

私は、昨年のワールドカップで惨敗したことで、「日本はもしかしたら強いんじゃないか？」という勘違いを一気に吹き飛ばされ、現実に引き戻されて、これで一区切りついた・・・日本サッカーの歴史の一時代が終わったんじゃないかと思います。

日本代表人気も昨年の夏以降下がり続け、代表戦のチケットも売れ残るような状態です。今日（3 月 24 日）の試合のチケットは、先週ヨーロッパ組（高原直泰、中村俊輔）の招集が決まるまでは、チケットぴあの残数もずっとフルオープンでしたから、よほど人気がなかったんだと思いますが、なんとかぎりぎりで完売するのではないかと思います。

これからの観戦ツアーですが、今年の一番の特徴は、Ｊリーグのクラブが海外に、アジアチャンピオンズリーグに挑戦する点です。浦和レッズと川崎フロンターレという人気チームのおかげもあって露出・報道も多く、「クラブの国際試合」の観戦というマーケットが広がってきている気がします。昨日のニュースでは、今年のクラブワールドカップで開催国枠ができるらしいですけど、そうじゃなくアジア王者として出場してもらいたいですね。

■ドイツには、外国人を迎え入れる下地がある

昨年のワールドカップでホスト国ドイツの人の対応について少しお話します。私は仕事ということもあり 2 カ月以上、現地（フランクフルト）に一軒屋を借りて住んでいました。オーナー家はご主人がペルシャ人＝イラン人、奥さんがドイツ人でしたが、その家には最新のコーヒーメーカーがあり、下見に行ったとき、ご主人がその使い方を延々と説明をしてくれるんです。ドイツ人の飲み物といえばビールと思いがちですが、実はドイツで一番消費される飲み物はビールじゃなくてコーヒーなんだそうです。熱心にコーヒーの入れ方を説明してくれる人・・・というのがドイツ人の最初の印象でした。

そのほかに気づいたのは、ドイツ人が「国旗」好きということです。国旗をもって試合に行くのはドイツ人だけではありませんが、柄のついた小旗を試合会場でみんなが振るのはドイツの特徴ではないでしょうか？柄の付いた旗はスタジアムに持ち込めないことが多いのですがドイツ人はみんな小旗を振っている。これは不思議でした。セキュリティー上問題はなかったのでしょうか？…。

あとは、先ほどの話にも出ましたが、始まるまでは盛り上がらないというのがドイツの印象でした。それは、ドイツ人のマイペース的なところなのでしょう。で、始まったら私たちのような外国人に対してとても親切にしてくれました。レストランに日本語のメニューが登場したということはないですけれども、もともとドイツでは多くの人が英語を話しますし、外国人を受け入れるベースができていたんじゃないかと思います。やっぱりヨーロッパの真ん中に位置し、いろんな国の人が来るところだから、わざわざワールドカップとしての準備をしなくても、多くの外国人を迎え入れることができたのではないかと思っています。

■あなたは、海外で日本人に出会ったとき挨拶しますか？

最後にパブリックビューイングについてです。これがたぶん、日本人とドイツ人、というよりヨーロッパ人と一番違うところじゃないかと思います。パブリックビューイングは「タダ」なんです。タダだからパブリックビューイング。日本のパブリックビューイングはお金を払って会場に入るじゃないですか。そこのところが全く違うんです。日本の法律ではたぶん街頭など公共（パブリック）の場所に何万人もが集まることはＮＧなのでしょう。そのためスタジアムなどを借りて、パブリックビューイングと称したイベントとして行われているのです。

ドイツ大会決勝戦の前日、私は３位決定戦を観戦するため、ベルリンのブランデンブルク門に出かけました。しかし試合の３時間以上前なのに入場制限がかかっていてパブリックビューイングに参加することができませんでした。その時すでに１０万人以上がつめかけていたのです。これが無料のパブリックビューイングです。私はブランデンブルク門でのＰＶ観戦をあきらめて、仕方なく他を探したのですけど、運よくすぐ近くに「アディダス・スポーツパーク」があって、入場料１ユーロで入ることができました。何とか入れてよかったという感覚でしたが、実は中は満員ではなくけっこう空いていました。これはおかしい？？　すぐそばで 10 万人以上があふれているのに、なぜここが空いているのだろう？地元のドイツ人がこの場所を知らないはずはないのに…。今考えるとドイツ人は 1 ユーロを払うのがいやだったんじゃないかと思います。ドイツ人は質素で言い方を変えるとケチと言う人もいますが、１ユーロをケチる、そういうところがものすごく現実的な国民だし、パブリックビューイングに関してもお金なんか払わないぞ　という強い意志を感じました。

それから、もうひとつ感じたのは、われわれ日本人の性質です。例えば、日本人がドイツの街を歩いていて、ほかの日本人らしき人とすれ違うとき「こんにちは」とは挨拶しませんよね。どうでしょうか、みなさん？　私なんかが突然話しかけたら怪しいやつだと思われて無視されるでしょうが、海外で見知らぬ日本人同士が、自然にあいさつすることはあるのでしょうか？　例えばワールドカップ期間中に、ポルトガル人同士が街で出会ったら、しかもサポーターらしき格好をしていたら、必ず声をかけあって仲間だということを示します。ポルトガルはヨーロッパの端なので、「よく来たな」って感じで余計に仲間意識が強くなります。ホテルのエレベーターでも、レストランでも、通り一遍の行為なのかもしれませんが、同じ国のサポーターだとわかったら、挨拶を交し合っていい雰囲気になります。そういうことができない日本人というのは、海外に出たときには日本人に会いたくないという国民性なのでしょうか?　そう考えると、そんな国民が海外で国際大会を観戦するのは、なんだか不自然・・・成熟していないような気がします。みなさん、自分に問いかけてみてください。向こうから日本人らしき人が歩いてきました。さて、私は自然に挨拶するかな？　ひょっとして中国人か韓国人かもしれないけれど…一応、声かけてみよっか？となるでしょうか?　同じ国民同士なのに、しかも海外にいるのに仲間意識が薄い、そんな日本人だとしたら、海外でパブリックビューイングする意味は無いのかもしれません。このことは、サッカーの民度とも大きく関係していると思います。

最後に、これまで何度が話に出てきましたが、２００７年の期待として、Ｊリーグのクラブがアジアチャンピオンズリーグからクラブワールドカップへ挑戦すること、日本代表がアジアカップ 3 連覇を達成すること、そして、これがなにより私にとって一番大切なことなのですが、日本代表の一刻も早い人気回復を願いつつ、この後の試合や大会を盛り上げていきたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

中塚：ありがとうございました。だいぶ時間も経過しています。場所づくりの時間も含めて、５分ほどお時間をいただきたいと思います。

（資料 1） 日本のサッカーファン・サッカー文化の歩み

日付	当事者として体験したイベント	第三者として体験したイベント	レギュレーション変更	サッカーファンと環境の変化
1993.05.15	Jリーグのスタート		延長戦＋Vゴール	Jリーグブーム（一時的）の到来 スタジアムに行ってみようと思う人の発生
1993.10.28	ドーハの悲劇		W杯アジア枠 2	何が起こるかわからないという サッカーの怖さを日本国民が体験
1994.06		アメリカワールドカップ	勝点 2→3	Rバッジオの活躍、カズのジェノア移籍 欧州リーグの生中継が恒常化
1995			J勝点制導入	フットサルの日本上陸（94 年ルール統一） ボールを蹴ってみようとする人の増加
1996.07.22	マイアミの奇跡	イングランド EURO96		必ずしも強いチームが勝つわけではないという サッカーの面白さを日本国民が体験
1997.11.16	ジョホールバルの歓喜		W杯アジア枠 2.5（3）	最終予選・韓国戦からチケットが完売
1998.06	フランスワールドカップ グループリーグ3連敗		W杯 32 ヶ国に W杯チケット問題の発生	ヒデのペルージャ移籍 欧州リーグの観戦ツアーが定番化 日本人のチケット・アレルギーのはじまり
1999.04.24	ワールドユース（U-20）準優勝			この年の元旦で横浜フリューゲルスが消滅
2000.09.23	シドニー五輪ベスト8	オランダ・ベルギーEURO2000		
2000.10.29	アジアカップ優勝			
2001.06.10	コンフェデレーションズカップ 準優勝		W杯アジア枠 2＋2.5（4）	
2002.06	日韓ワールドカップ ベスト16進出			サッカーファンの底辺が一気に広がる 2 世代サポーター増える。ベッカム人気の沸騰
2003.06	コンフェデレーションズカップ グループリーグ敗退		J・延長戦廃止→引分	CL 認知度増
2004.08	アジアカップ優勝（連覇） アテネ五輪グループL敗退	ポルトガル EURO2004	J1・J2 入替え戦の実施	EURO のチケット購入者の国別ランキングで日本が 5 位という珍現象
2005.06	コンフェデレーションズカップ 善戦もグループリーグ敗退		W杯アジア枠 4.5（4）	
2006.06	ドイツワールドカップ グループリーグ惨敗		J・アウェーゴール採用 W杯レギュレーション変更	代表戦チケットが完売しない現象が顕著に
2007.03.24	オシム 07 初戦ペルー戦			欧州組招聘発表までチケット売れ残る

（資料 2） レギュレーションの変更・・・実例

表1−1

Rank	Team	A1	A2	A3	A4	Pts.	GF	GA	F/A
1	A1		○10-2	○9-2	○10-6	9	29	10	19
	A2	●2-10		●5-8	○8-4	3	15	22	-7
	A3	●2-9	○8-5		●2-4	3	12	18	-6
	A4	●6-10	●4-8	○4-2		3	14	20	-6

表1−2

Rank	Team	B1	B2	B3	Pts.	GF	GA	F/A
1	B1		●5-8	○8-4	3	13	12	1
2	B2	○8-5		●2-4	3	10	9	1
3	B3	●4-8	○4-2		3	8	10	-2

表2

Rank	Team	C1	C2	C3	C4	C5	C6	Pts.	GF	GA	F/A
1	C1		△1-1	△0-0	△1-1	○4-3	○2-1	7	8	6	2
2	C2	△1-1		●0-1	△2-2	○3-0	○3-0	6	9	4	5
3	C3	△0-0	○1-0		△2-2	●1-2	○3-0	6	7	4	3
4	C4	△1-1	△2-2	△2-2		○2-1	●2-3	5	9	9	0
5	C5	●3-4	●0-3	○2-1	●1-2		○2-1	4	8	11	-3
6	C6	●1-2	●0-3	●0-3	○3-2	●1-2		2	5	12	-7

表3−1

Rank	Team	D1	D2	D3	D4	Pts.	GF	GA	F/A
1	D1		○1-0	●0-1	○3-1	6	4	2	2
2	D2	●0-1		○2-0	○1-0	6	3	1	2
3	D3	○1-0	●0-2		○3-2	6	4	4	0
4	D4	●1-3	●0-1	●2-3		0	3	7	-4

表3−2

Rank	Team	E1	E2	E3	Pts.	GF	GA	F/A
2	E1		○1-0	●0-1	3	1	1	0
1	E2	●0-1		○2-0	3	2	1	1
3	E3	○1-0	●0-2		3	1	2	-1